

塔柳川

昭和四十二年一月九日 第一回新刊物認可
昭和五十四年一月二十五日印刷
昭和五十四年一月一日発行(毎月一日発行)
創刊大正十三年 通卷六二二一號



日川協加盟

No. 621

二月号

児島与呂志著

川柳句集「地下鉄」

刊行記念句会

日時 54年6月7日(水) 午後6時
会場 金属会館

南区鰻谷東之町10番地

(地下鉄堺筋線長堀橋下車東スグ)

(電話271・3935番)

柳話

「足」

黒川 紫香

「改札機」

児島 与呂志 選

「乗りかえ」

野村 太茂津 選

「河内弁」

西田 柳宏子 選

橘 高薫 風 選

席題 当日(二題)と選者発表
会費 千円(句集呈)

発行所・大阪市南区鰻谷中之町二〇

川柳塔社

序文 中島生々庵
編集 不二田一三夫

頒価 千円

(送料共)

夢が広がるシヨッピング
近鉄がお届けします



アベノ町
上本
奈良



高橋操子著

(千五百円・送料共)

川柳句集「千亀利」

川柳新聞から一生への情熱が川柳作品に反映されて読むものに感動を与え、生きることの喜びを教えてください……

——借金があるから自殺など出来ず

——合掌をすれば十指の素直なり

発行所 川柳塔社

世 見 顔

くたぶれた心へ屠蘇のめでたけれ

雪だよりあの村あの森母の墓

呑みたらぬ裏通の風つきまとい

捨て台詞煩惱去らぬふところ手

指切りも出来ずやっとな長電話

例年のご厚意で、ことしも京都の顔見世を旧臘、昼夜通して観賞する機会に恵まれた。私達夫妻にとっては何よりの年の瀬で、小唄の文句ではないが浮き世のチリの捨てどころ、あした待たるる宝船でいい心持ち。世間の義理や親子の至情。頭の中を煮えたきらせながら、毎年浜寺の自宅に帰りつくのは十一時過ぎてゐる。殊に老妻にとっては、明るく新しい年は未歳の当り歳だし、私は私で、ことしの、奥州安達原は、去年の良弁杉由来二月堂と共に一番好きなんだしもの。家に帰りついてからも、やや暫らく胸のたかなりを禁じ得ない。豪華な芸の名舞台の美しさときびしさとが、眼底から消え去ろうともせず、そのまま、新年の芽出たさにまで続くのである。去年姿を見せなかつた松緑も、不自由な足を観客に気付けぬ程の大活躍、多彩な演技に堪能する程身がひきしまる思いであつた。とにかくめでた続きである。

中 島 生 々 庵

川 柳 塔 二 月 号



座右の句

酒とろりとろり大空のころかも

(路 郎)

私の句

時計台くるつた俛で動いてる

井 阪 東天紅

川柳塔 二月号 目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

顔 見 世…………… 中島生々庵……………(1)

売れる川柳に…………… 長野 文庫……………(2)

俳風柳多留廿五篇研究……………(二十三)……………(26)

清 博美・八木敬一・紀内恒久・青木迷朗・西原 亮
鈴木 黄・室山三柳・入江 勇・岡田 甫

川柳塔 (同人作品)…………… 西尾 菜 選……………(4)

水煙抄…………… 正本 水客 選……………(30)

俳諧賭博の本命は前句付 (川柳太平記⑨)…………… 東野 大八……………(24)

秀句鑑賞 ……(同人吟)…………… 河村 日満……………(42)

愛染帖……………(水煙抄)…………… 香川 醉々……………(43)

古川柳現代解釈法…………… 橘高薫風選……………(44)

香川 醉々……………(48)

売れる川柳に

長 野 文 庫

十二月うれしい風も少し吹け 路 郎
「年末助け合い運動」が年々ひろがり、放送局とか新聞社などが積極的に力添えするので、大いに盛り上っているのはご承知の通りであるが、これに協力する個人、団体もふえて来、助け合い協力の処分市、即売展、パザールからチャリティ・托鉢まであつて、まことに頼もしい次第である。

証文は要らぬしっかりやり給え 路 郎

ところで、この活動に一番熱心なのは美術団体のようである。当地方でも毎年「助け合い協賛美術展」を催しているが、去年の暮にも松山市の女子美術クラブの会員がNHKのロビーを借用して、作品の即売展を行い、その売り上げ金を寄贈したことがニュースになったが、聞けばその額が四十万円ほどあったと言う。その時、会員へのインタビューが放映されたが、ほとんどの方は習画歴三、四年の人であった。

川柳界にも各地で個展、グループ展などが

54年度二賞候補作品中間発表

路郎先生の著書など	福田丁路	(28)
一分間の柳論	八木摩天郎	(41)
森寿風さんを偲ぶ	植村客遊子	(53)
本社兼・席題課題表	榎谷寿馬	(47)
雅号ぶっちゃけばなし	吉原紅月	(64)
初歩教室	本田恵二朗	(40)
大萬川柳「開幕」	川村好郎選	(52)
柳界展望	川竹松風選	(54)
本社一月句会	(庸佑・整理)	(56)
各地柳壇(佳句地10選)	奥谷弘朗選	(58)
「贈り物」	津田与史選	(61)
一路集「雪女」	堀江正朗選	(50)
「立春」	川竹松風選	(51)
編集後記	(一三夫・葉子)	(67)



座右の句

駄馬でよし千里の道も遠からず

(好郎)

私の句

また六十老眼鏡も新に替え

稲葉星斗

開かれているニュースも聞くが、まだ美術団体ほど頻繁に行われて居ないようだし、また助け合い運動にも余り参加していない。運を待っているようにこの頃働らかす

路郎

川柳人もふえたし、愛好者も多い時代だから、こうした催しをすれば必ず相当の成果があると思うのである。

各地の川柳人が年中行事としてこうした運動に参加するのも川柳発展に大きな意義があり効果があると信ずるのである。

近頃、川柳が非常に普及し、家庭婦人の作家もふえ、川柳の文学的価値が認識されたとは言え、まだまだ川柳の社会的地位は低く、充分理解されていない。大学入試などに川柳が取り上げられていると言っても、その対象は古川柳に限られている。

川柳に無関心、無理解の社会へ徒らに腹を立てる前に、堂々と現代川柳の良さを世間へ押し出すべきではあるまいか。

文庫

句刊紙広告主へ見せるため
川柳作家間のみに通ずる川柳であってはならない。川柳に理解のない人にそっぽ向かれる川柳であってはならない。

お互いに精進して「売れる川柳」にするよう努めたいと思うのである。

草の根よ僕もたたかう草の根よ

路郎



西尾葉選

島根県 堀江正朗

僕よりも僕を知ってる妻という

ひとさまはみんな見えてる忙がしさ

盲人のせめて夢だけ豊にし

ありったけの色想い出すままに塗る

指先をもて遊ぶとき孤独

気短になったか音が逃げてゆく

靴音も残る今年を小刻みに

九州の生れ女へ意地をもち

喪中欠礼ことしの夏は暑かった

プロイラー何考えることもなし

円満と云われ辛抱しています

阿修羅になり賀状を書いている

校庭でお辞儀をされてふり返えり

岡山県 直原七面山

無駄話の中で刑事の掛けた罍

知恵薄き子なれど草笛が上手

市場籠を下げた男の細い首

一年生が傘ごとお辞儀をして通り

嫁った娘が婚家を代表して喋り

一年を歩きつかれた寝正月

背水の陣に二の矢は置いてない

羊頭も狗肉も走る選挙カー

番犬へ羊あわてないあわてない

たった一ペン見られたことが致命傷

恩讐を越える盃あふれたり

降り積る心の雪の私語なるか

肌寄せて北山杉は霧に濡れ

右折左折しても突き当りに出会

い

大阪市 本多柳志

倉敷市 水粉千翁

もったもな話に距離のある親子

大阪市 金井文秋

折れ合わぬ二人と他人が知っている

血圧があがるぞ主役降り給え

生活の防衛役は逃げておく

沈黙の武器をか弱い女持つ

聴き飽きて口癖の数読んでいる

鳥取市 河村日満

男なら来いと裏大山嶮し

面当ての言葉呑み込む豊かな日

生者必滅など云うとれぬ葬がくる

なみなみと快起を兼ねて祝う屠蘇

怪俄の子が移る陽かげを見てる午後

竹原市 山内静水

容姿こそ変れど羊の如し妻(五十九才の妻に捧ぐ)

お話中ですがとズバリ切り込まれ

司会者の舌がもつれる「あらせられ」

堂々と無職と書ける趣味がある

みとれてた奥様たばこをすいはじめ

岡山県 浜野奇童

子の帰省喜ぶ腰が伸びきらず

飛べそうに思える小川を飛びそこね

取り敢えず反対をして想を練り

クローバの愛のページで干からびる

ア、カ、サ、タ、ナ子の宿題へ母は辞書

倉敷市 野田素身郎

着ぶくれて感受性まで鈍くなる

焼酎を友に格調高い詩

二次会になり人格の殻を脱ぐ

風格がでてきて糖尿病になり

最敬礼そうか候補者だったのか

倉吉市 奥谷弘朗

従いて来るだけの女房で足りるのに

海鳴りへ地唄にしぶい喉を乗せ

要領と利巧へもひとつ大胆さ

おとぼけで済ます心を睨まれる

行動派なぞと大胆非難され

尼崎市 黒川紫香

星降らず都会のごみになりきれず

色瓦雀も嫌いがあるらしく

寒雀人間様の咳を聞く

夢のない一日だから庭を掃く

ボンボンとついて来るのが怖くなり

高槻市 若柳潮花

切れる気になってお弟子をとりはじめ

二位でよしコマネチ娘らしうなり

認知してもらたが取れる当もなく

若柳流リサイタルより

色即是空鐘は怨みの音で鳴り

山めぐり姥へうつり変る四季

泉佐野市 阿萬萬的

一人旅が好きです負け犬に似た姿
つるし柿壁を一層白くする

枯蓮は尼僧の正座に似た色か
夫唱婦随それぞれひとり芝居かも

観光用 水車悲鳴に似たきしみ

青森市 工藤甲吉

冬に包まれて無心に湖ねむる
灰色の空 心にもものしかり

雪国の人の背中にあるかげり
雪国の宿命貧を抜け切れず

鱈ちりへ海と山から雪が降り

岡山県 嘉数千代香

も一人のわたしがとつせん弓を引く
すこし横向かねば嘘が云えませぬ

人許すことにも馴れた背の丸味
新聞で包む真心がぬくい

円周を走りつづけた駄馬で暮れ

米子市 八木千代

悔いのない日々を天寿へ積むばかり
菜を洗う旅の火照りはまだ指に

旅の夢墨絵となって硝子拭く
母の灯を抱いてほちほち残り旅

垢のない下着を朝の支えとす

米子市 林瑞枝

雪明かり浮世の塵を消して降る

子には子の人生家業へ欲を捨て
本を読む暇欲しかったひとり旅

育くめば鉢正直に春を咲き
音楽に国境のないドレミファン

冬に雲今日の善意を信じたし

自主性に欠けてる靴を光らせる

思うように帯が結べて他人の計
残り菊老女の愚痴のそばで咲く

計算機天皇の遺産のせてみる

今治市 月原宵明

平凡で愛の技巧などは無し
不動産屋の情報壁新聞みたい

掌に乗るしあわせをいとほしみ
報酬を上げて年末市会閉じ

幸うすきひとの手にある水仙花

今治市 長野文庫

応援の一つ女生徒鶴を折り
ウイנקを誰にしている北斗星

日々好日嘘でもないが真でなし
ただの丘二人で来れば素晴らしい

神経のにぶさ幸せかも知れぬ

宝塚市 傍島静馬

千羽鶴しぶしぶ折ったのも混り

大声で聞かれ素うどん云いそびれ
手腕より金がランクを左右する
感動はしても自分でやる気なし
僥倖にたよる落目を笑えない

島根県

小砂 白汀

鶉の真似をしてる利き酒苦しかる
ねんころりハーブが唄うねんころり
アクセント変えれば言葉に棘が生え
三年目仮面はずして向きなおり
言わずだけ言わしておいて丸めこみ

和歌山市

野村 太茂津

信号を出すだけで良い笑顔
端役脇役寄り集まれば皆主役
飲びが目から鼻から突きあがり
飲びになんぼ飲んでも効かぬ酒
よろこびをむき出しにした阿呆である

八尾市

香川 酔々

霜柱踏んで自由な靴がある
甘酒を飲んでしこりを解くがよい
冷戦だ緑十字の旗振ろう
神様と遊ぶ聖者の行間で

午前二時あなたの夢を買いましょう

倉敷市

田垣 方大

踏まれない麦に寒さが耐えられず
悩みごとみせない姿落葉焼く

武器捨てたように定退後の花壇
恋愛に無菌な女の崩れよう
早春の噴水嫉妬しはじめる

愛媛県 渡辺 曉童

もの前近く 野党攻勢
犬の目でさえ 目が物を言う
誤植字余り 拙な世渡り
車中春色 手話の饒舌
ダンブにも似て 師走到来

八尾市 大路 美幸

父の振る無題の旗が昏れ急ぐ
小細工を知らない父の太い指
物欲へ心の線が引き切れず
臆測がはずみ女は殺される
灰皿に祈りを貯めている無口

大阪市 川口 弘生

先生も病氣と患者の目が光る
もっと悪い人あると病人教えられ
腹の虫がぶつぶつ云うてる食養生
陽は西に男の影が細くなる
一期一会 鐘は自分の音で鳴る

島根県 堀江 芳子

あなただけに通るわがまま知って
雨のち晴れ空も佻しさとおりこし
天気予報 夫婦の日にも似て親し

また後で言うとは小言かと思ひ
脱ぎ捨てに馴れてスリッパ驚かぬ

大阪府 西 出一栄

寒中に水かけ地蔵へ容赦せず
妻病みて会話少なし冬の底
日向ぼこ冬の貌する庭の石
水仙の白に孤独を支えられ
除夜の鐘心の旅路飄飄と

兵庫県 遠山可住

その過去を他人から聞く父の酒
柿一つ残りわたしも旅に出る
ぎりぎりに佇ては親子の紐がある

肩書が三つ忘年会忘年会

晩秋の地酒貴様と俺になる

大阪府 河野君子

紅葉はらはら胸の疼きを乗せて舞う
粹少し外ずして嫁のものを買う
朝の靴夫の外づら見してしまう
もちつき唄知るはずもなし餅搗機
師走風がとっても好きな旧い町

西宮市 藤村 女

桜へ鬼もピエロとなるゆとり
棘のある言葉をまるく受け流し
スランプの迷い出口が見つからず
何も彼も忘れて広い空の青

音のない少女の指話が夢を追う

八尾市 宮西弥生

憶測に踊る女がひとりいる
一匹の働らき蜂がいて狂う
外面の女に計算洩れている
ここだけの話になると眼が光る
爽やかな話題朝のランニング

八尾市 高橋夕花

てのひらの中で今年も暮れてゆく
黒髪にあふれる程の業を持つ
千手観音にすがる両手を洗いきる
ポチ袋運るたのしさもあり十二月
無欲にはとてもなれない銀杏散る

豊中市 安藤寿美子

三寒にもろに当たった旅となり
名園の添景として鴨が来る
長崎の歴史哀しい事ばかり
伴天連の涙のように時雨来る
羊かておこれば頭突きくらわせる

今治市 越智一水

球根を植えささやかな夢を持ち
壁にまた初心わすれて突きあたり
灯を消せば妻も同んじこと思ひ
子の恋を妻と語るも秋なるか

北陸の旅

雲水の里でちらりと亡父の声

鳥取県 鈴木村 諷子

師の一語わたしに生きて肩をうつ
ぼろぼろになった芭蕉の故郷こいし
ふるさとの雪は煎じて飲むがよい
こまやかな人情雪に温存す
金のこと触れぬ痰阿に血が踊り

美弥市 安平次 弘道

親の眼の死角で少年背伸びする
マニキュアの赤がスリルをそそのかす
空っぽの腹胃カメラにさぐられる
退屈な日々脳味噌がやせてゆく
地に落ちた草の実春を疑わず

大阪市 神谷凡九郎

本当の自分を知らぬままに死ぬ
これも僕それも僕他人が見てる僕
ああ俺と云う男は口にしたくはない言葉
振り付けもせず自分の舞を舞う
変人だと妻子が保証判を捺す

大阪市 江城修史

子に賭ける夢暮切れのないドラマ
プライドを捨てれば生きる糧がある
背かれた日を憶う夜の小糠雨
ちぎれ雲人の絆のむなしさよ
除夜の鐘人それぞれに聞く音色

下関市 国弘 半休門

山羊髭で己未 迎えようか
古い歌だが歌うか僕の唄
玄関で話そうこっちも十二月
長崎雲仙にて
平和像鳩が手に飛び足を這い
雲仙は霧水 天草はきりの中

東大阪市 竹中綾女

孫ももう高校大学寄りつかず
凍て蝶の陽が照り出すと身じろぎぬ
いつ寝ても何時起きてもよい一人
花八ツ手夜目にも白く浮き上り
贈答品売場三回廻って決めかねる

松江市 小林孤呂二

大根にあま味がでると雪を見る
紙袋きちんとたたむ母があり
ベストテンに位置づけられて休めない
備えあれば憂いなしとて足りぬ日々
温室に育ち散りぎわ弁えず

奈良市 宮口笛生

富士山の夢見たことの恐しく
人憎む心の哀れにふと気付き
気の弱い男で酔うた日が怖い
ふるさとの秋新米をもろてくる
完全でないから人間面白い

泉大津市 村上春巳

友情の酒はゆっくりゆっくりまわる

五十には五十の話があるのれん

鼻唄の鼻が木枯切ってゆく

警察へ出前が届く歳の暮

五〇円入れて善人顔をする

東京部 山根白星

傑作の世評えてして死後のもの

ピンカールさしもの美女もただけぬ

凍蝶や身につまされることに見る

寒椿訃報しきりな昨日今日

板前は義理のしがらみゆえに去り

枚方市 宮川珠笑

逆境に太ってくれる妻がいる

掃除機に猫も夫も動かない

針に糸通す女の険しい目

家族みなハイハイハイと主婦酷使

抽籤の瞬間平常心くずれ

竹原市 小島蘭幸

お見舞いに行けば泣くからもう行かぬ

病院のスリッパで行くコップ酒

妻のお腹のまるさよ春はすぐそこに

レントゲン全治三日が笑えない

スケールの小さい男がもつ仮面

竹原市 三宅不朽

流れ雲落ち矢のごとく立つ枯木

人の訃の忘れやすかり母達者

星の詩旅にしあれば旅の位置

雪しんしん秘仏も山彦も眠むり

にっこり笑いにっこり血を抜くのもナース

大田市 藤田軒太楼

誰か知るピエロの頬の涙あと

期待した程に歯車噛み合わず

焦点をぼかし急場を凌いどき

割引いて聞いておくのも年の功

味のある言葉ににじむお人柄

大阪市 中川滋雀

年の瀬へ押し流された借りを抱く

コンパスを拡げて円い人間図

折返し点から私が見えてくる

回想にのるナツメロの母性音

出来すぎた話に落ちが見えかくれ

倉敷市 稲田豊作

入院中「笑って辛抱」とすると決め

二人部屋「僕は社長」と言う人と

掃除婦の話涙を溜めている

とても孫が恋しくなつて赤電話

「柳行李」読めば柳魂寝ておれず

出雲市 原独仙

酒の上許されぬこと赦すこと

人生の関門幾つか越して喜寿
平均の寿命生き伸び儲けた気
嫁姑気が合い忙わし大晦日
これからの抱負の中のぼっくり死

神戸市 仲 どんたく

初春を秋のタレント撮り溜める
年の瀬を勘亭流で書く京都
残り火を掻き還暦のメロドラマ
今日も亦鮎釣っているシユバイツア
菊の気で育てた鉢に蓬生え

横浜市 岩 井 本蔭棒

ア—ウ—を松舞台へ出す時流
サラ金と縁切れぬまま年を越し
旅たのし方言で道教えられ
あかんかてもともとという背を押され
うたかたの果てを地蔵に問うてみる

大阪市 西 川 誓 二

諸行無常老いて達者は口ばかり
そこが要領当たりさわらない返事
言うて見るものOKと云う応え
化粧のお蔭人の中へ出せる顔
年の瀬を流されまいと老い夫婦

寝屋川市 江 口 度

走りだしたうそを良心が追っかける
前略と草々おれの客帰る

おれを見上げて途方にくれているかけら
冬の夜明けにいつも楽しい夢を見る
女の師走くつしたがりというブーツ

大東市 土 岐 トク子

母守る会に目頭あつうなり
還暦に憶うは亡夫と亡母のこと
孫三人抱いて還暦ポーズとり
メリークリスマス第一便はスイスから
献体の同意熱つばく母は説き

松山市 谷 真 風

なんとなく祈りたくなる丘の上
人生のゴールにテープなどはない
無職今日ネクタイ締める用が出来
内緒話は風が自由にもっていく
掌のまめは僥倖なんか考えぬ

島根県 西 村 早 苗

叱られた孫と童話の星へ出る
馬の耳ピンと真冬の陽をつかむ
手土産を買わねばならぬやつが留守
たくらみも知らず一升瓶にふれ
白痴美の笑いおもちの顔となる

和歌山市 松 原 寿 子

秒針の高鳴る胸にある余熱
面影を伏せねばならぬ人へ炎え
烈しきもの通う確かな愛を抱く

瞳に見えぬ糸で心のあや結ぶ
プリンスと恋をしました夢の視野

大阪市 有 信 新之助

肥ったなと思う顔を洗う朝
ものの云い方を知らぬ男の高い鼻
溜息もいつしか消えた夫婦の膳
信号を慌てて渡れば老が出る
衝動買だが安い物ばかり

松江市 中 川 晃 男

人の性善にして誤解され
飯食うてしまえば戦がばからしく
元職を書いて特典申し込む
心せく一日終る師走の灯
神様も儲けはじめの初詣

八尾市 納 糸 葉

砂時計失うものと得るものと
裏町の天使お好み焼きが好き
通勤になれて私のけもの道
未練など持たぬ櫓のいさぎよし
端正な男も札の音が好き

大阪市 大 坂 形 水

東京から見れば大阪地方都市
大阪の歌舞伎人口どうなった
合理化の反対叫ぶのがわかる
倒産の友へ力のなりようない

めんどろな手続きがある救済金

大阪市 不二田 一三夫

「消印有効」どっこい隅で生きている
人間の番付 金持ち順に出来
ボーイッシュユパフで叩いている不気味
駄洒落云う女 減点されていた
嫁かず後家のようにメロンが売れ残り

東大阪市 市 場 没食子

人生の黄昏に来て訴訟沙汰
老いつれど足は軍隊仕込にて
自分でも年寄りくさい背を気にし
外見のしよぼくれに似ず弁がたち

桜井市 岩 本 雀踊子

産み月の娘が帰えて来た疲れ
青いリングに集る若き男達
耳の穴腹の立つことばかりきく
流れ星歯の浮く様な詩もなし

川西市 戸 田 古 方

耳がきこえ眼が見えるから迷います
いくつになっても女はソプラノで喋り
淋しうても損や得やがいいとうて
左遷か右遷か絵が描けそうなどこらしく

大阪市 西 森 花 村

減量経営何処も同じ冬木立
売切って花屋の正月花が無し

ありがとう何時か本当にそうおもい
風流人どこかで収支あわせてる

松江市 岡崎 祥月

有事論語る戦後派戦前派

青い鳥逃げたあとから追っかける

美しい湖ふるさとの宝もの

日数が刻々消える暮迫る

京都市 都倉 求芽

ビルばかり映して街の河老いる

トレパンの一群朝を破る白

素直に喜んでくれるから褒めやすい

いっときを車窓の小春にもてなされ

和歌山市 垂井 千寿子

夢で見た亡夫の若さを妬いている

土壇場で母の意見が見直され

古里で心の帯も解けてくる

平凡という幸を寿はがれ

島根県 藤井 明朗

新春へ希望をつなぐ詩の旅

むらぐも誌三十周年の春

柳縁に結ばれ30年の春開く

年始客選挙の話置いて行き

この世の楽園 にほんのマイホーム

米子市 小西 雄々

青写真どおり進まぬ街づくり

葉よりお灸を好む妻となり
目をとおすメニユーへせかすように立ち
一合の酒では出せぬ安来節

藤井寺市 児島 与呂志

妻だけにわかる言葉で病んでいる

冬の雲寒くなりそう陽をかこみ

古傷に誰かがふれそう会議済む

自惚れが女の笑いを秘めさせる

西宮市 島居 百酒

邯鄲の夢も包まん羽根蒲団

言い負けた後で名論浮かんで来

不肖の子締めながら身を案じ

隠棲の身になってからの健康法

鳥取市 小林 由多香

うらぶれた父花道に遠く居る

持ち味を見抜いた師匠の鞭が来る

背信へ眠むれぬ枕裏返えし

雄めすの神秘レンズに捕えられ

大阪市 山川 阿茶

中年もまげずに手を組む日曜日

岩清水もわが道をゆく右左

一人世帯屠蘇も煮べも貰いもの

チャンネルをまわせばいやな唄ばかり

松原市 玉置 重人

首相落選不確実時代とや

ノド仏今日は阿呆になるつもり
ノド仏持たぬ男は信ずまい
ラッシュの中で何かを思うノド仏

京都市 松川杜的

民話楽し善玉の鬼も居て
自作自演わが人生に悔はなし
お地藏さんの眼に悪人等は居ぬ
十二月鳩さえせっかちに歩きよる

大阪市 河井庸佑

聞きじょうずうまく本音をしゃべらせる
主役だけ残して宴会待ちかねる
招待へ電話で合わす寄付の額
反対派ここにおるぞと言う抗議

平田市 久家代仕男

牛が泣く角だけ見せて芒原
海鳴りが釣りの無謀を叱るごと
古釘の抜かれとうない音で抜け
パンダほど祝福されずまた孕み

倉敷市 小幡里風

孫に風邪貰ったらしい日の自嘲
白足袋が少し慌てた牡丹雪
陽溜りへ話の続き持って来て
突然がこんな形で来ようとは

倉敷市 藤井春日

人容れる心の持てぬ哀しさよ

大学の翹びたつ空はうす曇り
夜の顔見せとうない母であり
クラス会検事と弁護士酌みかわし

姫路市 梅谿庵不醉

主義主張あいつ何処まで自尊する
どの位貸すか僕を自己評価
やむを得ぬ時代に勝てぬ姑の座
いいことを言うても明治古いです

和歌山市 津田与史

昔はこうだそんな言葉は忘れよう
いろいろな記念日出来て夫婦老い
梅林へ心洗いに行ってくる
このように生きろと春の海の詩

米子市 石垣花子

裸の身晒し街路樹春を待ち
老と歩調合わせて進む物忘れ
手に持った砂です女の友情は
旅の服はずむ心を知る仕上げ

守口市 羽原静歩

雑談の中で急所を突いてくる
風車走れ走れ自閉症の子に
能面を捨てる樹海はむらさきに
蒸発も思慕も我執も終列車

鳥取市 両川洋々

働き蜂を踊らすタクトは妻が振る

裏金のワイロと知らず秘書包む
台本も持たずピエロの僕踊る
なめ合えぬ傷あり別離の淵にいて

兵庫県 河原 みのる

枯れぬ間に見ておこ橋立 松島や
こいつ奴が荒しよったかボタン鍋
おんやおや寺にも神棚あるのなり
覗き猫と目がぶつかつた気味悪さ

笠岡市 松本 忠三

玄関の見馴れぬ靴は誰だるか
祈禱札最下位にして気がひける
女房が靴を磨けば雨が降り
足蹴りにされてもダルマ元の顔

岡山県 出原 敬一

なつかしい片割れ亡父の疋の下駄
意に添わぬ菊を法事の客がほめ
二泊三日の旅へ中将湯もゆき
晦の貧に耐えてる喉仏

岡山県 竹内 翁童

子の無い夫婦にヤカンの湯がたぎる
美術館小さな夢を満たしに来
打つ手ない頼みをもって初詣
居直って不況会社を腰をすえ

姫路市 植村 客遊子

指鳴らし男ファイトをかき立てる

アベックはバックミラーへはばからず
お連れあいですかと顔パスきいてくれ
一輪車サーカスの娘の脚線美

鳥取県 川崎 秋女

白水仙何を思うてひとり咲く
キナ臭い匂いもしてる招待状
チャンスまだつかめそうなり十二月
恙のう暮れておせちの昆布巻く

堺市 高橋 千万子

逢えるかも知れない駅が混んでくる
よく聞けば辻褃合わす裏話
何人も通した背広今日うれる
一年の計になかった医者通い

大和郡山市 森田 カズエ

福耳だからと安心しておれず
カタカナで書けばジャノメもこわくない
中高大入試へ妻とする謀議
いくさとは受験のことと子は思い

島根県 錦織 文子

乳房吸うとくとくと吸う安堵
平和な世の中だと思ってる幸福論
あなたとの出会いちやらんぼらんで終りそう
したたかに酔うから街の灯があなたたかい

島根県 榊原 秀子

雨の日もよし色さまざま傘の花

悲しさは趣味なき人の愚痴をきき
安息日持たない母にある微笑
先生が添える一枝で花が活き

島根県 大森孝華

ハネムーン萌ゆるふたりヘレモンの香
年の瀬へひと役買って子守唄
寿の余韻へ過去がふとよぎり
野心などさらりと捨てて星流る

唐津市 新岡回天子

愚痴一つこぼさず妻はついて来る
アルミ貨が水に光って寺繁盛
今日からは姑となるお勉強
泣かされてばかりうちの子くやしがり

竹原市 森井菁居

思惟の旅時計は見ないことにする
鬼の面替えても鬼になり切れぬ
惑うてはならんと一本杉無口
標的にする夕映えの塔がある

西宮市 若林草右

空中サーカス糞虫の揺れやまず
悠悠自適どうやら昼寝のことらしい
止めさせるものなき患者に医師こまり
どっこいしよ錯びついた関節の悲鳴

東大阪市 斎藤三十四

三十年空気のような夫です

脇役の方へ拍手がたんとくる
家裁から元の名前になりました
健康の為に歩くと聴診器

呉市 槇田英詩

羊歳それでも羊売られゆき
春愁や娘二十二の花盛り
すれ違ふ近所の奥さんみな美人
正直な鏡見たい日避けたい日

諫早市 原田明春

豊作へ政府米価しぶり出し
惚れた因果に開けた寝顔をそっと見る
扶養手当妻子の価値の低いこと
何もかも半端になって年が暮れ

岡山県 白岩文衛

叱られる児が多すぎる多すぎる
ものさしの目盛りに人間合わせられ
良心を少うし押さえて評定す
ほめられる人の卑怯を見てしま

仙台市 川村映輝

名文の弔詞何とも白白し
棘の無い造花のバラに魅力ない
運のよい人だと努力認めない
表彰をうけるための工作日日忙し

大阪市 室谷徹舟

気がつけばまんじともえの中に居り

便所まで菊香らせる菊の候

知りすぎてけむたがられる羽目になり

服装も妻の支配下にいる平和

大阪市 天正千梢

切り札を持って楷書の暮らしたり

「ハイ」と言う言葉を持って嫁に行き

裏切られるのが怖いしかと目をつむる

取りしづめる地位をちよいちよい忘れてい

伊丹市 樫谷寿馬

もの言わぬ日も愛だとは知るや妻

生意気な杖よ一人で歩けるか

新しい花束待っていた港

竹筒の香りに六十らしく酌む

和泉市 西岡洛醉

各停にしようか俺も五十坂

盃からグラスへ酒は人を変え

運命線変りそも無い朝が明け

勤務明け孤独の昼をどうする気

竹原市 時広一路

使い分けするには脂切れた顔

円の中友といるから出たくない

迷ったらノックの出来るドアが有る

正座して視野少しずつ広がりぬ

宇部市 平田実男

強いられた拍手と知らず講師笑み

車ほど自分を点検整備せず

奥さんを亡くしそれから若返り

酔っているものかと他人の靴をはき

羽曳野市 塩満敏

どんぐりを探しに一人の旅に出る

東山牛車の姫を覚えとり

落柿舎の柿は今年も落ちてみせ

過疎の村麦踏むことも忘れかけ

寝屋川市 宮尾あいき

時雨よし嵯峨野の紅葉色を増す

もみじの簪化野の石仏

死の日まで我人生をあきらめず

やっと独りになれたと云うに孫の守

岡山市 川端柳子

家中の電気を点している独り

妊ったらしいと青い曲に乗り

憤慨が出来てニュースに飽が来ぬ

信じたら冬の心が軽う溶け

守口市 野呂右近

断らずチャンネル変えてから白け

一言が言いたく座布団辞退する

トンネルを抜けて明るさ増す話題
人命に値段をつける事故輪禍

岡山市 時末一灯

倅せを問えば笑うただけの人
子らは一人一人の鍵でしか開かず

貝塚市 行天千代

逃げたくも家を背負った蝸牛
受験子を芯に廻っている二月

自分から先に折れよと娘に教え
道しるべなき世を渡る若夫婦

七尾市 松高秀峰

女とて後へ引けない意地も有り
冬空の星の一つに亡夫は生き

設計のあちこち削る預金高
いいとこでつづくになってコマーションシャル

鳥取市 大塚豊生

夕刊の記事にまさかと思う人
下積の長い課長の角がとれ

日記買う未知の白紙に夢かけて
絵図面に土農工商分かれ住む

和歌山市 西山幸

落人の村に紙すく唄がある
鈴付けた猫が己を見失う

暖炉燃えるとひとが恋しくなるグラス
支払いへかすかに動く優越感

ぬくぬくと生きて見下してる灯り

そんな空気へきれいな童話欲しくなる

米子市 増田竹馬

お隣の新築電気ノコの音

一生の秘密煙となって消え

保険屋の鞆パンフレットと縁談と

筆勢とぼかして水墨画が喋べる

玉野市 小谷仙山

問題の其の源に清水湧く

細くとも操る記憶の糸が有り

にこにこと言つて笑う相手が恐くなり

だからと言つてこん度の事は許さない

大阪市 柳原静香

六十の一步を飾る菊を活け

すし買うて帰る夫の律義者

内助の功どころか手を借り耳を借り

家計簿の疲れ切つたる十二月

大阪市 津守柳信

真夜中の作句も馴れた一人きり

錯覚の愛に人生ぬりかえる

思いやり悟りあつてる眼に出逢い

Uターンしたのに心が直進し

大阪市 黒田 真砂

嫁かぬ娘が心の波を高くする

打算もつ女計算出来ぬ恋
矢面に立たねばならぬ寡婦の城
空の旅終り仕事の手につかず

沈んだ心見すかして開く自動ドア

和歌山市 内 芝 としよ

自由とははかなきものよ妻の椅子

忍従の母の姿や福寿草

鳥取市 佐々木 静 泉

敗者復活そんな旅路も繰り返す

待つうちが花でポーナスすぐに散り
入院も居付けば帰りづらくなり
おじいちゃんピンクレディのファンなる
無いものをねだった愛でけつまずき

糞虫の細工で生まれかわろうと

兵庫県 北 山 越 山

抜本策ねずみ一匹捕れただけ

心の隅にあるからうっかり口ばしり

和歌山市 若 宮 武 雄

木枯や案山子に詩の旅姿

軽い身の肩寄せ合つた吹きだまり

雑草にもおなじ自由がある自然

看板のやはり素気ない裏の貌

姫路市 大 原 葉 香

井の中の蛙に水が濁れ始め

海見える車窓で話題又かわり

ターミナル百面相がたむろする

サラ金心中えんま様まで泣いており

和歌山市 吉 野 富 子

昂りをおさえる女畳拭く

かるい怪我くらしの情性を戒める
あこがれの丘に住えば丘見えす
音のない独りの夜は寝つかれず
胃袋がも一つほしいフルコース

大阪市 本 間 満 津 子

堺市 伏 見 茂 美

鳥根県 飯塚 虎 秋

明日咲く花を見つめていた瞳

細々と余生を飾るポールペン

川音に碎ける月が妻に似る

人情が消えて四角いビルが建ち

鳥取市 有田 とし江

落葉踏む母子へ愛の吹き溜まり

夕焼けに染まれば寂しい影法師

雨よ降れ心の傷も流すほど

目覚めよい朝は亡夫に逢えた夢

岸和田市 島崎 富志子

枯れはてた涙を湧かす三回忌

掌中の玉神よ御覧と七五三

そこまでと送って出たに鉄砲玉

幸に酔うた日 月も目を細め

竹原市 鈴木 かつ子

まだ泣ける私は倅せかも知れず

音痴にもある好きな曲いやな曲

廻り道して人生の裏を知る

ゴルフ場働く汗と遊ぶ汗

京都市 山本 規不風

金の事触れずに礼が要ると云う

槍持ちの末裔の娘を押しつける

表札のように古くはないあるじ

そこまでは親しくしない筈の金

桜井市 河合 茂 雄

妻の振る鈴の音色は濁らない

誇など持つと心が重くなる

ホテルの部屋で読ます聖書置いてあり

朝の街人間嫌いで散歩する

大阪市 神田 秀 峰

老人の無料が病室占拠する

待ち合せ待たせた方が肩たたき

言葉付き態度も変る役が付き

美しい言葉が何より贈り物

鳥取県 金川 満 春

恩給も無い花道で趣味に生き

停年に趣味のふれあいしかと抱き

ひそと住む老境時折り笑い合い

招待に妻の立場もある意見

寝屋川市 高田 博 泉

猛犬注意シュピッツを飼う

なんとなく暮して私の城ができ

正直に暮して何もない所帯

いや味にも受け取れそうな咳ばらい

大阪市 北 勝 美

やりくりへ髪が伸びてる大晦日

丸い石丸い心を抱いている

玄関へ日向へ閑な父の鉢

石の苔石の温みを知っている

西宮市 杉 浦 婦美子

新聞から取り越し苦労ひろい上げ

振り向いたところに欲しい妻の顔

立看板車窓にひろいひとり旅

十三夜いとしき女よ妊ごりぬ

鳥取県 福 田 保 子

懺悔する涙を知っている枕

ポーナス返上連休返上社のピンチ

風邪の子へ母の額いが冷たすぎ

腹芸の母です一家が丸く住む

鳥取県 林 露 杖

断ち切れぬ過去を抱いた影法師

退屈の思索のとは安楽死

未知という標的に必死の矢を番え

大阪府 横 地 雅 風

鎖だと思えば長し退社ベル

寄せ書きへ小さくそっと文字の下手

物欲に壁なき心に壁を塗り

大阪府 神夏磯 道 子

世間の目じつと堪えてる振子かな

骨あげへ約束ごとも灰になり

善人の鏡は表面だけ映り

倉敷市 藤 原 桜 山

商売の辛さに変りない屋台

老眼で虹が見えればそれもよし

生々流転そんな私になりたくて

倉敷市 斎 藤 通 風

殊更に海が藍いと言ふ不幸

断絶の子がテレビで親をほめ

同棲の喜び寿命を考える

鳥取市 岸 本 無 人

薬にも毒にもならぬ程で酔い

出ることの多い財布をまかされる

暖房に浮かれてゴキブリ叩かれる

大阪府 欄 蘭

燃えつきた彼岸花にも秋深し

新年へ人それぞれに有る波紋

中の島の鳩へリコプターには驚かず

東大阪府 崎 山 美 子

持ち味を認められたと言ふ自信

凶星だと言わせてみたい高い鼻

餌をひらう雀を猫の目がとらえ

岸和田市 清野 こう

帝王の魂を抜く酒と薔薇

竹原市 古谷 節夫

団地住まい音に遠慮の有る暮し
湯浴みさす腕に応える児の育ち
胸を打つ操子句集に涙する

宝塚市 吉田 笑女

嘘並べ夫婦のひもが長く延び
政治屋と言う看板で商いし
鎌さびて男盛りを持って余し

尼 緑之助

始めての旅のふたりはもう六十路
愚痴を言う夫婦へ暮のすき間風
次へもう目うつりしてゐる児のおもちゃ

三重県 坪田 冬花

父死んでからまで徳に助けられ
無口だが家庭を守る父が好き
九官鳥妻の名前をもう覚え

松原市 北野 久子

陸中海岸

正本 水客

ワンマンの孤独へ素直にお茶を立て
耐える事に慣れてて言葉に棘を持ち
天高くくりくり太る孫を抱き

姫路市 藤後 実男

雲は異端者 視野およぶ限りを海にする
屹立し蟠踞して岩 波に会う
大断崖つづき海の猛りを受けとめる
灯台の白 象眼となり海に浮く
みちのくの寒さを笛は呼んでいる

伊藤 茶仏

石蹴って明日へ気分入れかえる
大砂丘明日へ変る風が吹き
結果だけ言って上司は叱かるだけ

奈良県 松田 宇宙太

怪獣の行く手にあった変電所
からっぱの心で食べる握りめし

陽光を羊の干支がしよってくる
宛名まだ書かぬ賀状が積んである
骨相がよくぞ似ている国なまり
閣僚の椅子で均衡とる派閥

二ヶ月が肌を喰いこむお人好し

瑞雲と見れば工場のガスであり

隙のない暮しをすれば肩がこり

読むものがなくて雨の日もてあまし

常識の貧しさ話また途切れ

なるようになるさと深く深く寝る

散り急ぐ枯葉にもある運不運

子供らの本能遊び場もう見つけ

鍵っ子へ入陽ようしやなく沈む

即席の童話で孫を眠らせる

移植ごつるべ落しを追いかける

焼きなおし利かぬ体と気がつかず

この俣に死んでもよいと泣きつかれ

肝心なとこ鼻声で聞きとれず

十三時そんな時計が見当らず

然るべき人とはずぼらな人のこと

田中博造・峰代夫妻に女子誕生

虹の子を千晶とこそは名付けたれ

浜田 久米雄

ガラス絵の群青特にクリスマス

除夜の鐘 僕はレモンの鈴を振る

ラブレター死屍るいるいとありにけり

サラ金の悲劇へ怒りと哀れみと

新聞を配る子にやるお年玉

アイバンク登録新春の計とする

昂ぶりが少なくなつて老の坂

愚息独立

脱サラの息子励ます老いの知恵

川村 好郎

明日のこと云わないことにする老夫婦

思い出をたぐるも老の安らぎか

飽きもせず飽かれず夫婦五十年

あの人の行方今更思うまじ

おつき合いはしますと女背を向ける

西尾 朧

和顔愛語元旦の心しる

そこはかの色気ただよう三カ日

駅裏の十歩余りの歳の市

恍惚の笑い顔を嗤えるか

美しい心をもっていると慰さめる

橘 高 薫 風

川柳 太平記 (9)

俳諧賭博の本命は前句付

東野 大八

俳聖芭蕉が死去し、蕉村が出現するまでの間の年代、つまり享保年間を中心とした約五十年の間を世に享保俳諧、俗に「くらやみ俳諧」と呼ばれている。この俳諧の暗黒時代を別の見方からすれば、この俳諧の谷間こそは俳諧の大衆化時代ともいえる。

宮廷貴人の間で寡占化された和歌の道が、連歌を呼び、貞門の古式伝授の作法まで生んだ俳諧の連歌の嗜好が、大幅にレベルダウンして無知な大衆まで格下げされ、雑俳の世を招き寄せた過程を、大きく二分すると、都市風と田舎風に大別できよう。

まず都会風とは、江戸の洒落つけや、比喩俳諧を中心として三都中心に浸透し、現世享楽的な人情描写に興味をもち、軽妙かつ新奇さをネラって人の意表をつく態のものであ

る。これに対し田舎風とは美濃派や伊勢風とよばれた東海地方中心の俳諧で、蕉風末期の軽味のものに仮名詞による平談俗話の支考風を加味したものといえる。

都会風にしろ、田舎風にしろ、素町人として風雅の仲間入りができる魅力を帯びていたわけだが、それを上回る景物取りの興味がいやが上にも大衆の人気を呼んだのである。

この景物取りも、初手は盃・扇子の類がエスカレートして、ついには金子の授受となり次第に俳諧賭博の傾向に墜ちてしまった。

一体賭博とは何か、いろいろとその定義づけには異論があるが、帰するところその主旨は「合意の略奪斗争」ということになる。だが平安貴族や、近世の旦那衆が「遊興」として賭博する行為をふくめてE・パーグレーは

その「賭博者の心理」(一九三四)で

「要するに賭博は、神経病の昂進を意味しその病源の価値はスリルである」

ときめつけ、人間の実性から抜き難く、その行為の手段は、常に奔放なアイデアを生む」と述べている。ドストエフスキイの「賭博者」(一八六六)ではないが、俳諧の場合にも「さまざまな賭博行為の方法が、賭博者自身のための数多の形式を生んだ」次第である

俳諧賭博の場合の、賭けのポイントとは何か。それは前句にあった。景物取り(懸賞)の手段として、この前句をいろいろといじくり回した。即ち五七五の長句もあれば、七七の短句もある。七五もあれば一一もあり、うんと切り詰めて五文字も生れた。この中で一番好評だったのが五文字方式で、ここから生じたのが笠付・冠付略して笠という。また最後の方に置くのを沓(くつ)付、一名沓ともいう。

さらにこの前句付にひねりを加えて趣向上の変態が生れることになった。いわく「もちり付」「段々付」「ものは付」「謎付」「小倉付」「国名付」「人名付」などがそれである。これが往時の前句付懸賞の種類であった。この事例の記録を記したいが長くなるの

で、五文字の笠付だけを例にとると

「となりから」「酔う紅梅の垣根ごし」

「いますこし」「花盗人のみじかい手」

「太宰春台「独語」(文政13年—一八三〇)に

「かくいやしきわざになりぬれば、下部の

わらわ、げすまでも俳諧ということを知りて

笠付してはうびとらんとするほどに、詞いよ

いよ申しくなれり。宝永(一七〇八)の頃

より冠の五文字を三つ出して、三つの冠に各

七文字五文字を付けさせ勝負を分くる、これ

が三笠付という。その後五文字の冠を出さず

下の七文字五文字の詞をやめ、ただ数の文字

を封じて、外からこの数をはかりて札を入

れ、当れば金銀をとらすこととなるに至りて

は、正しく賭博なり」

三句組合せ(別名つまみ)は賭銭一文、三

句当れば六百元、二句なら七文。四句組合せ

(別名四ぐる)となると賭銭四文で当り七百

文、次点十四文。更に五ぐるまで出現する。

この前句付賭博は、貞享年間(一六八四—

一六八八)がピークで、果ては「棒引き」と

称する俳諧にコト寄せた三笠付のでたらめぶ

りが横行するにおよんで、正徳五年(一七一

五)幕府は三笠付に関するつぎの御定書の規

定を出した。享保十一年(一七二六)極

(1) 三笠付点者、同金元並びに宿 遠島

(2) 三笠付句拾い 家財取上 非人手下

(3) 三笠付致し候者 家財家蔵取上候程の

過料。家蔵無之者は五貫或は三貫文の

過料

前句付賭博が世に広まると、その板元は当

然、一種の企業形態をとるわけだが、その例

を笠付を発売した京都雲鼓に例をとろう。

享保四年の時点だから、幕府御定書実施の

笠付禁令が正式に世間へ出たいわけだが、そ

んなことにへこたれる江戸町民ではない。し

かも禁令発布直前ごろよき稼ぎ時とみだに相

違ない。

京都前句点者は数多いが、二十人とみて月

並興行で月産一万句となる。それを取次所が

八方から持ち込み、入選句を清書する。点料

は点者の貫録に応じて八文から十六文とある

から、年間莫大な金が動くわけだ。

田舎俳諧の伊勢山田の、一句建ての冠付の

「筆鸚夢」(享保五年)の記録にみると

「判者三、四人ありで毎夜深更まで笠付の

寄句を按じ」「翌早朝、各取次への入勝発表

あり」「これらの句取りは主として一句建て

なり」等がみえるが、この前句付の応募句を

よく多く入手する手段として、ある回船屋

の主人は、積荷より句稿集めに企業価値があ
るとみたか、尾三駿にわたり息のかかった点
者を急造し、その入勝句だけを集めて板にし
たという記録もある。

前句付が、もちり付、段々付、ナゾ付とい
う風に、幾通りもの手法を生んだのは、禁令
以後の笠・冠付の俳諧を換骨脱胎して、法網
をくぐる手段として考えついたものと思われ
る。

享保期の前句付は、いわば俳諧賭博の中核
期を意味するわけだが、この期の点者の主な
判者クラスはつぎの通りである。

▽浪速⇨来山、西鶴、才丸、由平、万海、

豊流、遠舟、因水、園女、鷺石

▽京⇨言水、幸牧、似船、和及、鞭石

▽江戸⇨其角、不角、不卜、調和、閑水

▽伊勢⇨羅青、友永、団友、芦本、涼菟

このうち来山、西鶴、言水、其角は今日の

俳壇古典にその名跡を残しているが、この中

で最も川柳点と後世にゆかり深い前句付の点

者は、其角とその門下の不角で、ともに江戸

座点者である。不角(立羽)は慶紀逸の一頃

の師であり、其角は間接的に柄井川柳につな

がる。ちなみに柳博などに作者名のないのは

その賭博性による世間態の所為かもしれぬ。



岡田 浦

誹風柳多留廿五篇研究

—(二十三)—

397 まあうゝといひなせゑなと正灯寺

室山―「正灯寺」は、「浅草竜泉寺町〔台東区竜泉一丁目〕」にあり、東陽山と号し臨濟宗妙心寺派の寺。(中略)品川海晏寺とともに紅葉の名所であった。吉原に近いため、紅葉見物と称して、吉原へ登楼する者が多かった。〔「江戸文学地名辞典」〕。

正灯寺まだ素機嬢で同意せず 傍三・18
寺の庭見るふりをしてすすめ込

傍二・33
の場である。吉原への同行をしぶるのは入簾が多いが、この句は人物をそこまで限定せずともよいと思う。

紅葉からされハといふハ女房もち

一一・23

あたりか。

西原―贊。現在の正灯寺からは紅葉は想像出来ぬ。吉原に近い事は変わらぬが。

岡田―贊。

室山三柳・入江
八木敬一・紀内
西原亮・鈴木
恒久・青木迷朗
黄・岡田浦

398 振袖を着たすっぽんに引かへる

室山―不明。
入江―「辞彙」―すっぽんに「花嫁の替玉」とあり。やはり「月とすっぽん」に関係あるか。

瓜に茶を飲ませ絲瓜とひっかへる

清―「瓜さねを見せてかぼちゃととりかへる」(拾一・36)の同想句か。

青木―「嫁の替玉」、「月とすっぽん」説贊

岡田―吉原句。名代の句です。いいなじみ客が来る「貰い引き」といって、遊女はその方へいってしまふ。その代りに名代の若い、振袖新造がくる。名代と云つても、月とスッポングらい貧弱……というのです。

399 両替屋六十四文はねのける

室山―この句「川柳風俗志」にあり。続いて両替屋五十四文はね過る 五二・35
の句があるが、両句とも頭註なし。
入江―「六十四文」は、ビタ銭の意であろうが、なぜそういうのか明確にできない。
八木―本句は、両替屋の「切賃」を詠んだ句であろう。
西原―同。両替屋の「切賃」でよいと思う。『守貞漫稿』に「兌銭を俗にきりちんと云、切賃也」とある。時代によって当然その額が変化したと思う。寛政六年は六十四文であったと思えばよいのであろう。
岡田―同。

400 よろけほふだいにしておく野掛道

室山―「野掛」は飲食物を持って野山を遊び歩くこと。ピクニック。酒を過ぎた男が、道歩くのよるけても、街中と違い危険もなく人に迷惑もかけないので、連れの者も放

つておくのである。しかし、畑の中などへふみこむと、お百姓に、

遠くからしつ叱られる野街道 傍四・9
となつたりする。

西原―賛。日頃、四角い生活だけに。

岡田―同。

411 やけふこゑ三味せんひきがまぎらかし

室山―「やけふこゑ」がわからぬので、どうしようもない。

入江―焼生越へ。焼野のあとに、草のはえた所。焼野に同じ。春の頃。淋しさをまぎらすための、旅芝居の一行の三味線ひきが……。

八木―入江氏説で正解と思いますが、何かこの「こゑ」は三味線とからんで「声」のような気がしてならない。「やけふ声」というような表現があるのではなかるうか。

鈴木―どうもはつきりしない。

岡田―「やけふ」は俚言察覧にも入江氏の解しか載せていません。「こゑ」は八木氏説のように声と思いますが、「やけふ声」未考。他に類句か文献を見つげぬ以上、これも確定のとは申せぬ。宿題とします。

412 千金の目を桃の木で子ハおしひ

室山―「千金」は「春宵一刻直千金、花に清香あり月に陰あり」によつた語で、こちらは

夜でないため「目」としている。「桃の木」は、玄徳・関羽・張飛の三人のいわゆる「桃園の義」であろう。「子」は劉備玄徳で、至孝の人であつたから、義が結ばれ義軍を結成して出発するため、母との別れを惜しんだであらう、というのではなかるうか。

しかし、この句どうも別解のあるような気がして落ちつかない。

清―難祭の句と考えています。

青木―難祭説、賛。

岡田―同。ヒナ祭り。

413 奥家老髪 of the 膏薬をつけ

室山―『川柳風俗志』に「髪 of the 膏薬を張る奥家老」とあつて、「髪 of the 膏薬」の註に、「付ケ髪」とある。

したがつて、「胴上げで坊主にされる奥家老」は、十二月十三日の煤払いの胴上げで、その付け髪が剝落したことは、これまた同書の頭註の示す通り。

入江―禿頭のつけ鬢説賛。びんつけ油でなでつけたように見える。

清―入江氏説、賛。

岡田―同。

414 着せかへて母おかしがる足のうら

室山―どこかへ出かけるのに連れて出るとい

うので、いい着物に替えさせてから、あちこち向かせて、着付けの具合をたしかめて、子の動きから、ひよいと足の裏を見ると真黒だったといった場面でもあろうか。着物とちぐはぐなところが、母の笑いを誘つたのであろう。

入江―賛。あるいは、うっかり成長した足の寸法をとり忘れてか、足袋が小さくて合わな

い。

清―「足のうら」だから、足袋ではなく、単に汚れを発見してのことであろう。

岡田―同。せつかくの盛装もダイなし。

415 悪たいの買喰ひ答をあげてする

室山―伏見・大阪間を往来した客船三十石船（伏見舟）夜舟の情景。「悪たい」は、淀川名物枚方の「くらわんか船」。寝るのにかぶっていた、「答をあげて」「買喰ひ」を「する」のは、三十石船の乗客たち。この「悪たい」によつて、この特許を与えられたのだという（『広辞苑』）。

入江―賛。

目をこすり餅くらわんか酒くらへ

淀の商人京だんでぞんざへる

岡田―同。

路郎賞
川柳塔賞
候補作品中間発表

自 53年 9 月号
至 53年 12 月号

路郎賞候補作品

(到着順)

正 本 水 客

無然たり年はもゆかぬ恋の唄 山根 白星
雨音を聞くと便りがしたくなる 野呂 右近
原句(雨音を聞く)と頼りが仕度くなる)
大病もイイネ生命と(会話して来た)

捨て場所がないポケットの石ひとつ 神谷凡九郎
西山 幸

どんぐりコロコロ安住の地を求め 工藤甲吉
一言が欲しいな父の居らぬ家 梅 みどり
コーヒーに比べ安いと値上げ論 大坂 形水
親に似るその当然が怖くなる 和田維久子
ことさらに友とは云わぬ友ばかり 水粉千翁
女にはいまだに執行猶予中 若柳 潮花
口癖の多忙仕事を追うて足る 藤井 明朗
テーパーのりんごも梨も横を向く 高橋夕花

若 本 多久志

風鈴の音が父になり母になり 藤井一二三
茜雲ふつと逢いたい顔が浮き 藤村 べ女

忍従がまだ残ってた坐りだこ 田垣 方大
敬語つかう自分が小さく見える日よ

ビールびん栓する父のいとおしく 阿萬 萬的
父のない子の山彦は返らない 山内静水
兄のおしめ換える十指にある祈り 岩本雀踊子

母背負う母の重さへたら踏む 和田維久子
荻の寺荻の浄土の美しく 那須 鎮彦
弁当を持たせて妻の朝が満ち 西森 花村
内芝としよ

十階に住んで指さす父母の家 大塚 豊生
霊柩車動いて秋が澄み渡る 岩田 美代
渦潮に巻かれてみたい色がある 小砂 白汀
友の訃へ捧げる夜とす虫の声 仲どんたく
消しゴムで消えない今日が暮れてゆく 杉浦婦美子

川 村 好 郎

貧富の差あり内角の和は同じ 山根 白星
少し弛めて別の手綱を締めてみる

美粧院の鏡の中で莫迦になる 野村太茂津
手のとどく距離の甘さは母の味 小出 智子
履きよいのと替える旅館の下駄でさえ 宮西 弥生

毛糸編む少しずつつずつ母になるんだね 中村ゆきを
小島 蘭幸

エリートもいつかは椅子に拒まれる 大路 美幸

ペンシルの芯は脇道など知らぬ 松原 寿子
一粒の砂で風紋の中に居る 川口 弘生
下町のてのひらに乗るぬくい銭 高杉 鬼遊

西 尾 菜

赤ペンよ暮しの手応えありすぎる 河野君子
薬局も酒屋も団扇くれぬなり 納 糸葉

冷房にしたかかと駐在話し込み 藤田野太楼
ルームランナー出世に遠い父の足 清水 一保
ルームランナー 出世に遠い父の足 清水 一保
肩書をとれば自分にさえ勝てぬ 金井 文秋

化粧廻しうしろ絶対見せまいぞ 西 いわを
旅の風生年月日も名も忘れ 中村ゆきを
水中花露の甘さは知らぬまま 藤原 桜山
サンガラスかけて小石につつまずく 藤田 保子

水着ショー変ったヘソも見せてくれ 原田 明春
音のする時計が好きな老いひとり

自主性のない和顔愛語なら捨てる
本間満津子

貧しかりせばコマコマとチマチマと
柴田恵美子

テーパーのリングも梨も横を向く
高橋夕花
記者会見パンダの尿の講義きく
若林 草右
転んでも押ピンほどの意地はもち

ペンシルの芯は脇道など知らぬ
鈴木村瀧子
秋晴へハゼ人間を楽しませ
松原 寿子
十三日の金曜日ひとりぼっちの宿直
小幡 里風

菊 沢 小松園

装訂に釣られ書評に騙される
本多 柳志
オルゴール拗ねることさえ許されず
八木 千代

考えるポーズで回転椅子眠る
野田素身郎
人の世の美空ひばりも年を取り
鈴木村瀧子
一陣の風に逆らう揺もある
和田維久子
いい女ですかと鏡の奥に問う
関 美子
妥協する音で積木が崩される
嘉数千代香
月下美人一夜かぎりの主役なる
安藤素美子
ため息は歩道へすてよう明日がある

見抜いてる嘘を黙って聞いておく
落合 思月
西山 幸

橘 高 薫 風

碁を打ちに行く囁託もあるのなり
谷垣史好
青柿がポトリ水子を想わせた
工藤 甲吉

考えるポーズで回転椅子眠る
野田素身郎
澄み切った水底太古が見えるよう
川端柳子
老いの不倫の藤の咲く頃
渡辺 曉童

古里をそつと尋ねた人の供華
椋谷 寿馬
珍らしく素直な妻とレストラン
小西 雄々
走馬灯過去も未来も逃げ切れぬ
八木 千代
イエスマン奈良の鹿にも似たりけり

泣き黒子しゃべり黒子もある女
西森 花村
蛇口から水洩れ傾いてる会社
安藤寿美子
音のする時計が好きな古いひとり
大江 秋月

太陽が海に沈んだ海の深さ
本間満津子
西村 早苗

川柳塔候補作品

黒川 紫 香

じつとしているのに小石蹴とばされ

子沢山熱のある子と母は寝る
原田凡太郎
片方の耳で噂は聞いて置く
鶴田扶実雄
浦野 和子
砂田 静佳
下水まで水を探して来た蛙
小谷 葉子
花の散る速度で心変わりする
松川 芳子

京にいて京の土鈴を買いあさり
松川 芳子
主義主張ないのが共鳴する恐さ
中谷 利美
父さんが課長の会社たかが知れ
加藤 茶人
枝付きの栗はしばらく活けて置く
竹内花代子
片隅に律義な父が靴を脱ぐ
梅本登美也

父も娘も息子も好きな赤いシャツ
朝倉 大柏
北風とならば昇っていく風で
船越 汽水

戸 田 古 方

幾筋もある道細い道を行き
岸本豊平次
体臭は消してもなかなか消えぬ嘘
串田句味地

真すぐに積んだ積木のまたくずれ
山根喜代美
ぶつぶつ言うていて指を切り
柳原 孝柳
命賭けた道に道標など置かぬ
牛尾 緑楼
仁王像の阿吽の間にある笑い
辻 文平

へらへらしてても四十は四十
小林鯛牙子
コーヒ飲みに行こうよメダカみたい
園部 正則
泥んこの子供供のド真ん中
辻 善彦
声だけで驚いていて驚いた
森脇 善彦

大 坂 形 水

前進の構えで玄関靴ならぶ
中原比呂志
囁託になる日を妻に打ち明けず
西本 保夫
したたかな老いナムマイダナムマイダ
松本 文子

病氣してからいろいろの神が来る
坪田 冬花
カナリヤの替りに蛇がトグロ巻く
大工静子

詫びるのに偉い名刺を借りてくる
朝倉 大柏
拾われるようにパートのバスを待ち
宮尾みのり

綺羅飾る孔雀うしろを覗かれる
矢野 佳雲
悲しいかな大きい方へ手がのびる
川上富子
点滴の音泌み込ますあばら骨
辻 文平

水煙抄

正本水客選

兵庫県 辻 文平

バレットの彩では足りぬ秋景色
許される範囲で円周ひた走る

東京都 村上 由希子

花活けてまだ落付かぬ朝もある
悪口の妻へ補聴器はずしとき
妻なれば飲み度い顔を知っている
石で打つ釘へみんなの眼が落ちる
雑談になれば裸になってくる
蟻を見てたら忙しく動くのみ

島根県 角 耕草

サラ金を逆手に取った豪の者
今もなおロマンチストのふりをする
太陽のかけらを抱いてねむります
本当の君が見たいと君の云う
許される嘘をつきます母の顔

三重県 川上 富子

庭掃いて百姓やっと年を越す
炭窯の温みを背なに柿かじる
神お発ち里の百姓餅をつく
柚小屋の鉈にも吊す注連飾り
霧の村起してまわる集乳車

和歌山市 浦野 和子

落し穴まっすぐおちるのは女
生真面目な神が天寿を告げに来る
地の底へ響く挽歌を聞かせよう
もう一度燃えたし刃こぼれ研いでいる
ふる里の海にのんびり抱かれたし

大阪市 岩井 公平

振り向けばお伽噺の二つ三つ
振り巾がだんだん小さくなる夫婦
万葉と同じ古道の風の彩

橋の名を残して町の変わりよう
佇立てて図書館を出る星月夜

弁天埠頭鬻の汽笛は四国行

天神さんだけ昔をとどめビルの谷

おもちゃ屋の猿が師走をあおるなり

雲吹きとんで真冬の空の色

定退へ健康だけが気にかかり

窓越しに花も鏡を覗きこみ

金比羅船船絵馬堂へ来てはっとする（四国路にて）

展望は讃岐平野を秋にする

高槻市 竹内 花代子

和歌山市 福本 英子

波風を立てずはらわた煮えつまる

値引する見合いと知ってる娘の視線

豊作の米へ捧げる鎮魂歌

母ひとり子ひとりへ嫁来てくれる

年の暮末席温める日々続く

京都市 松川 芳子

ポトル今日もおんなじ位置で下戸の部屋

年の瀬に墓へ疎遠を託びて来る

団らんの部屋はばからぬ隙間風

息子から歳暮の届く核家族

四苦八苦名画で日本の弗べらし

尾鷲市 渡辺 伊津志

おもねらず生き来し父の歩き癖

お勤めを果した茶殻へばりつき

鑑賞の相手となった赤トンボ

職人の目が相槌を待っており
パレットへ初陽を作る色を載せ

広島市 光井 みほ

手の届く五十路若さの欲しい旅

つまりた心にともす灯を探す

視野の中河いろいろの彩で生き

晩秋のゆとり一人の陽と遊ぶ
だんらんの欲しいページへ湯がたぎり

鳥取市 中森 葉士人

紅一点なんとなく美人めく
試めされているのか葉また変り

縄のれんへ逃げてても解決にはならぬ

咲き誇る菊に根がある土がある

泣きまねで女はずるく立ち回り

今治市 矢野 佳雲

病む母へ落葉の窓は開けられず

野仏の高さへかがむ遍路笠
馬車うまの何かメッキの匂いする

背筋正して冗談へ笑えない

褒められて善意でやったことにする

呉市 山根 喜代美

人間の雑魚へ悪魔が網を投げ
吠えたてて見たい日もある寡婦の意地

ロマンスを育てて廻わす夫婦、ゴマ

反対のひとり正論かもしれず

踏み出せぬから加速度にさめた恋

羽曳野市 麻野秋畝

言訳もして寡婦酒をかうて行き

来世など云わぬ男が咲かす菊

命まで呉れと云わぬと借りられる

此の寡婦も着飾る職に落着けり

渡る世の五常へ丸い言葉選る

寝屋川市 小林鯛牙子

薄の穂そこ退けそこ退け登山バス

鸚鵡相手に悲しい酒を女飲む

保険屋へ俺は死なんと言ひ返し

北風小僧が魚板を叩く

広島市 すがかつこ

自画自讃妻のめでたい鼻が好き

横道にそれる話術も芸のうち

不協和音のまった中の昼の酒

金魚死す冬の星座のどれをやる

豊中市 満仲きく子

恋多き女 眉ひきルージュひき

うしろからざっと拝んで初詣

飲んで飲んで飲んで男の三カ日

流れ星わたしに何が出来ましよう

岡山市 砂田静佳

白菜の歯ざわりあまく秋深し

掛軸は自筆丹精の菊を活け

目覚しも起こす人無く音立てず
テレビ屋を頼めと停電知らぬ孫

大阪市 白石潔

いささかの金ふところに街 師走

王侯の風格当麻寺の寒牡丹

賑わして帰ったあとにプラモデル

叱ったらサッサと辞める女子社員

寝屋川市 稲葉好子

おばあちゃんに救急箱も付いて来て

六年生もう袖の下知っている選挙

母去んで晦日そばのつゆ辛くなり

初恋に泣いた列車はまだ走る

島根県 星野侑正

中海が白鳥つつんで暮れて行き

取締る取締ると政治の弱さ見せ

豊作に減反調整振り切られ

暗い世相に白鳥飛来でホットする

岡山県 岩道博友

民宿の窓から漁火懐しむ

空論に終って凡夫の座を空ける

図太さを読んで先手を打っておく

知らぬ間に会釈をされる人になり

兵庫県 野々口ゆう也

野仏の肩で落葉が話してる

木枯しが落葉に冬を乗せてくる

わが影を確め合うて老夫婦
一時間待ったと告げてよ花時計

松江市 梅本 登美也

やろうぜと松食い虫が団結し
古い二人夕餉に葱のひとにぎり
感受性つよい女の指が反る
火に油そそいだようなアドバイス

海南市 牛尾 緑 楼

定めとは言わず歩調を合わせとく
戦争に行つて拾つて来た特技
どこへでも行けと帳が下りてくる
幕引きをまかされている年の功

竹原市 古田 鈍 舟

追憶は静かな風の吹くように
地に還る一刻落葉空を舞い
華やかに自己主張して山枯れる
だんらんの窓ほのぼのと灯が赤い

総社市 水子 つるえ

嬰鏢とまだ書きかえる免許証
三カ日内孫外孫入れかわり
趣味持つてからは賀状の数もふえ
ポトポトと何時も蛇口の洩れる嫁

竹原市 岩本 寛 子

地に還るさだめを安堵とも思う
ある決意亡母のおもいが気にかかり

きんびらごぼう細くきざんだ母の味
やけ食いにハッと気づいておかしけれ

富田林市 中村 優

八方破れのロマンが欲しい漫画読む
決断がつかぬデイトで冬が好き
鍵穴の死角で嫁の笑い声
お悔やみがすらすら言えて寡婦戻る

橋本市 森 脇 善 彦

弁解はせずに明日の詩つくる
セーターを伸し綻抱いている
隙間風私を丈夫にしてくれる
受験生隣りへ電気つけて寝る

旭川市 朝倉 大 柏

男という意地をまげるに妻必死
日本の仕合わせ何でも言い放題
月の夜のまるさを誰も拒むまい
覆面をして正面のデモにいる

八戸市 島田 昭 治

神様もあきれぬくらい妻願う
母厳し五十の僕を未だ叱り
嘘つきが貧乏好きと云っている
濡れねずみ我が半生とよく似てる

長崎市 村崎 三 車

山荘に来て贅沢な眼をさます
リーダーの自負雑音に振向かず

昼寝から覚めて咳きこむ咽喉仏
ハガキより早く帰った旅疲れ

大阪市 平井露芳

見舞い返さないままあの世へ旅立ちぬ
調べたら菌にもアリバイあったげな
アマゾンの裸写してエロでなし
掃除器が省略させた大掃除

熊本市 北川一進

机上での計算損のないプラン
妥結した顔に煙草のけむ静か
商談の上手になった棒グラフ
教えてる顔が連れてく田舎道

尼崎市 中塚喜甲

有る物で済ます貴方が留守だから
亡き父を悪く云われて腹が立ち
義歯は義歯みかんの袋噛み切れず
道祖神に他所者と云う意識

唐津市 三浦ひろ坊

少額の貸しで催促云い出せず
職業欄無職と書かず明けておく
旧友が会いに来たセールスに来た
第三の人生などとキザな奴

寝屋川市 高田てまり

鏡から食み出た所が私です
甘えない鏡は素直に映っている

バックミラーちよいと借りてルージュ引く
閉ざされた心に鏡眩しすぎ

名古屋市 越村枯梢

賽の河原親には小石積むまいぞ
木魚の目見れば夜叉にも菩薩にも
思い出を手繰れば銀の鈴が鳴る
馬にも猫にも鈴がついてる音が好き

橋本市 岩倉天彦

儲けてる奴だがちびた下駄で来る
妻に子に権威が落ちて独り酌む
飲む程に金は天下の回りもの
手伝いも定時にしまいただ百姓

出雲市 板垣夢酔

良心を追い払う鬼とすぐ妥協
飛ぶ夢を現実にもどす矢が憎い
福の面かぶれば鬼もつい和み
夕吹雪漏れる人家の灯が温い

泉佐野市 大工静子

辻褃の合った返答がかんにふれ
友達に合わすリズムは背のびして
スリッパは履手の心の型になり
憎まれぬ老でありたし芋をむく

岡山市 井上柳五郎

むつかしいこと知らんがと的射られ
寄付額へひとこと言えばケチにされ

饒舌がバロメーターで父の酔いたわりの教師の愛へ死で甘い

大阪府 野田 君枝

貧政をなげく府民に文化の日

ポーナスの上積み狙う暮れ競馬

二次会の席に居残り政治論

冷房をしてデパートの歳末戦

大和高田市 岸本 豊平次

空想が膨んだまま寝息たて

寶石を知ってる指は愚痴になる

ひだり右同じ歩幅で転ばない

三日坊主と言われたくないランニング

新宮市 辻 弍

肘張って歩けば肘が突当る

下に置きや踏まれ上に置きや落ちる

此の峠越えれば何かありそうで

相槌を打つから足がひっかかる

川西市 氏林 洋敏

Uターンしてから運がつき始め

故郷の噂さへ体ごと動き

孫連れて帰る私のはしゃいどり

故郷で失意の友が二、三人

島根県 岩田 三和

太陽に干して冬物蓄える

気にかかる田舎でじっとしておれぬ

走り書き人の意見を聞きながら
おじさんと呼ばれて話若がえり

愛知県 池田 香珠夫

足裏で宙を蹴上げて海女潜る

萩終えて寺の裏門閉ざされる

婆がつくるいびつな団子よく売れる

諫早市 江副 二牛

嫁ぐ日も真近か華やぐ茶の間の灯

家庭訪問家の暮しも見て帰り

音楽喫茶ムードが好きと言うデイト

寝屋川市 福富 隆子

引出しの整理油虫を捨てただけ

靴下をついで息子は履いてくれ

ポーナスを預けてと銀行わめき立て

岡山县 池田 半仙

忙しいのに息子せつせとカー磨く

慰めの言葉に嘘も一寸と入れ

色眼鏡掛けて見たがるのも他人

大阪市 本多 俊子

羊とも犬とも孫の年賀状

万々が一をバッグへ宝くじ

三面鏡ゆうべの夢はうつるまい

岡山市 原田 凡太郎

何時までも達者でいたい初詣で

生きていることが嬉しく屠蘇を酌む

三か日時計退屈そうに鳴り

青森県 荒田 つる

無心しに来た友達と先ずは飲み
先生を友達にする僻地の子
何もかもうちあけ見事裏切られ

島根県 木村 はじめ

総辯選ヂヤンケンすれば金いらぬ
夫婦して違つた食事食べて居り
良い知恵を貸して呉れたは第三者

唐津市 山下 勝一

華やかな布団干してる新家庭
冷たい手無理に引いたら縁が切れ
派手好きと云われて女嫁きそびれ

出雲市 吉岡 きみえ

馬鹿になりきり五十年連れ添うた
妻の待つわが家だ炬燵暖かい
からからと落葉わたしの先きを越し

大阪市 堀口 欣一

家族みなそれぞれにクスリのみ平和
朝明けがこんなきれいなハイウエー
うしろから女の耳の美しさ

倉敷市 中津 伊勢吉

親子酒子が買うてきたうまい酒
貸し借りもなくて気楽な大晦日
落葉焚く愚痴も一緒に煙りにし

唐津市 岩崎 実

優勝の行方を賞状待っている
末席に陣どることを旨として
折々の語らいほしい日向ぼこ

山口県 高崎 喜桂子

出世せず落ちこぼれずに定年期
無人駅車掌が一人降りて乗る
言いたいこと言える日本にある平和

和歌山市 堀端 三男

艶聞を図太く仕事に活かす奴
原点に触れる恐さをだれも持つ
喜びの言葉もいわず寿と大書

和歌山市 坂口 公子

ピラニアもやっばりおどり喰いが好き
バラ色に変えたらとんで来た小鳥
おだやかな波で足跡消していく

岡山市 花田 たけ志

無理をした土産故郷で叱られる
開運のみくじ余生に間に合わぬ
傾むけば伏し目にみえる鬼瓦

出雲市 園山 多賀子

この母の後姿に教えられ
向い風横向きになり風そらす
爪噛んで独り者過去を覗かれる

羽咋市 三宅 ろ亭

五官外のものをもつらしい人に会い
窓際は外食の醍醐味を漁り
牧童の鞭群羊を恣のまま

島根県 佐々木 裕

鼻風邪の声も妻には丁度良い
アイドルが息子の部屋を狭くする
右の手で自分の左手握って見る

倉敷市 中 島 彩 平

献血も済みピフテキでも喰べようか
見舞客皆んな保証を付けて去り
金策の当もなく来た風の街

倉吉市 野 中 御 前

持ち味がわからぬままの離婚歴
進学に内助の母の夜が更ける
お陽様をひまわり笑って追っかける

東大阪市 萩 尾 真佐志

ゴキブリのこんな姿も神の意志
借金の事書出しの美辞麗句
蟹ガブリ親の仇を討つ如く

岡山市 清 水 金太郎

馬鹿だから馬鹿と言われて腹が立つ
病氣した事がないだけが自慢
聞く方も当てにしないでない拍手する

伊勢市 山 本 光 男

枕木を教え男は帰路につく

降ることは予想していた午後の雪
手焙りに素顔の餅が焦げている

高知県 山下 登

乳がはる腰のぼしたい田草取り
蛇の尾の消えた草むら見きわめて
土佐弁を丸出しにして蜜柑売り

尼崎市 中 谷 利 美

子の方が役者が上と知らぬ妻
死にたくもなし長生きもしたくなし
逆効果ねらう話術の叩き売り

大阪市 溝 淵 美紀子

騙される知恵も一つの円満法
孝行の仕納め老母と旅に出る
新装開店店は招待客で混み

倉吉市 一 風 庵

招待に洩れてはいないボスの顔
般若経位は暗記しています
壹円貨拾う勇氣を持っている

島根県 園 山 栄

火をつけりや燃える斗志の眼が恐い
生きざまを見て呉れ俺の傷の跡
逆わぬそこが取柄の丸い顔

東予市 小 山 悠 泉

一言の重み無口の父だから
ベ飾りつけて車も初春の貌

磨かれて靴元日の貌になり

唐津市 松垣岩光

過疎の地で老母は花とひとり住み
限界を越えた話は耳かさず

豊中市 田中善四郎

キンキンと靴音冴える寒の入り
空からも財布をねらうピラをまく

鳥根県 松本文子

不甲斐ない人生大きく口を開け
手をかけぬ菊も負けじと花をつけ
もう要らぬ命子供が大事がり

榎原市 西本保夫

磨いても光らぬ玉か子の寝顔

新年を迎えるまでの忙しさ

最敬礼ポーナスさまのお着きです

大阪市 藤森小雅子

囑託の辞令へ妻はのんきすぎ
囑託の辞令へポンと叩かかる
囑託の席端っこに追いやられ

倉吉市 田民碧水

水煙抄座右に秋を独り居る

本心を聴けば人間泥臭し

青森県 五十嵐操史

病んでみて人の情の底を知る
馬鹿と云い阿呆と云いつつ夫婦仲
混浴で幼馴染みの顔が合い

岡山市 串田匂味地

事故よりも泥はねに悲鳴の女達

天下りの事故死トップに報道され

兵庫県 川井白峯

年の瀬を冬一番が告げて吹き
途中まで来て吊橋に憶病が出
冗談の中の苦言を真にうける

呉市 玉志恵子

夕陽に輝き紀の川の水豊か

石舞台昔の姿のまま残る

松江市 岡崎雪美

さまざまな言葉を変えて借りてゆき
さわやかに話しはずむクラス会
口下手へ妻が出て来て用を達し

罪と罰人間だから意識する

鳥取県 和井颯洋

好きな餅除夜の鐘までじらされる
おたふくの目そんな所で笑わせる
持ち味を生かす器に水が無い

羽島市 伊藤 静枝

年寄って賀状の代筆出来る身よ
花八ツ手冬の日溜めて虫の宴

町田市 竹内 紫鏡

講堂で小走り質問者へマイク
さんづけで呼ばれて著者は大赤字

兵庫県 高橋 近江

団欒は連続ドラマへ目を細め
長良川鵜飼いの舟も冬籠り

長崎県 岩崎 和子

また同じ他人のうわさをもち歩き
人形の首切るような合理化案

倉敷市 大森 登竜

新緑を夢見て落葉地に還る
あばたにも笑くぼにもなる妻の顔

岡山県 二宗 吟平

年とった重みが出ないままの人
無人駅さざん草の中で咲き

島根県 山根 峰雪

家事多忙妻の寝つきの早いこと

大阪弁ふりまわし乍ら孫が来る

熊本市 有働 芳仙

卒業式答辞よむ子に親がない

長生きが重荷になつてくる福祉

新潟県 高野 不二

ナイフも使えぬ子供に育ててどうする気
余っても安売りすまい米つくり

唐津市 玉置 笹

美文調ころにかよう贈り物
おなじものまっていますよ贈り物

唐津市 田口 虹汀

虹を背に男は屋台車ひく
糸口がほぐれ夜食の段となり

唐津市 浜本 義美

結局は子の言分を聞いてやり
立ち読みの積りでめくった本を買う

出雲市 高見 鐘堂

酔うた振りして本音はく平社員
子を持って拳はポケツの奥に秘め

鳥取県 加藤 茶人

妻子待つ家路平和な歩は確か
妻と児が見送る職安とは言えぬ

青森市 木村 忠一

あられの日カミナリの鳴る不吉感
ドラフトは貧乏暮らしにあほらしい

★

大洲市 米澤 暁明

子を楯の話は家裁まで味方
易者の灯なぜか寒さはより易し
退屈を埋めてく暇な友が来る
首に巻く日の鉢巻きに職がない

★

トンネルを今出たというお正月
ともかく医療無料の年が明け
除夜の鐘あお儲けても損しても

コーヒー一杯せめて奢りの暮しむき

岐阜市 市川 鱈魚

▼一月号22ページ上段1谷 真風氏の作品1ラベル下に疵があると
は憎らしい

折り目切り目厳しき母に背が曲る

雅号ぶつちやげばなし (177)

こうげつ



吉原 紅月

よしはら

私が川柳に手を染めた頃、勤務先
の国鉄高砂工場には、番傘同人で重
鎮の長宗白鬼先生、病院長で転勤さ
れて来た川柳雑誌社の北川春果先生
が在職され、川柳も盛んで、当時の水府先生や路郎先生
紋太先生をお迎えして大会を開いた事もあった。大方の
先輩は皆白鬼先生に雅号をもらっていた。「白」「鬼」
「笛」と云う字がお好きなようであった。若い私はそれ
に何か抵抗を感じ「白」の反対の「紅」を上につけて紅
月とした。今考えると何と大人気ないと思うが以後三十
年近く紅月で通して来た。口の悪い柳友は温泉マークの
ホテルの名のようだと云うが今更変える気持はない。

(国鉄職員・五二歳)

▼水煙抄へ投句される方へ——雅号はかたが
た句の右がわへおねがいます。また、句を
五、七、五と空間をあけないようにご注意ください。
それから句の上へ番号や○をつけな
いよう、これもお守りください。書式は本誌
発表どおりにお書きねがいます。

あなたの

川柳句集を!

お気軽にご相談ください。

印刷全般

藤原童心社
〒504 吹田市天道町6番15号

でんわ(06)三八八一—三三七七番

路郎先生の 著書など

福田 丁路

古書店巡り、古書通信販売、百貨店古書展示即売会、或は発行当時等で入手した、川柳関係図書雑誌が、百冊近くになった。その内先生の珍らしい「童謡の森」については、昭和四十八年八月号「川柳塔」誌に書いたが、その後先生の著書及執筆の雑誌を、左記の通り入手することが出来た。

単行本では

『川柳漫談』挿絵吉岡島平、柴谷柴舟—昭和四年弘文社刊。箱が欠けて本自体も痛み、浅間丸のゴム印がある、完全な本も所持。

『川柳漫画行進曲』漫画吉岡島平・清水対岳坊・柴谷柴舟・宮尾しげを・昭和七年—弘文社刊。箱付で先生選句並編とあり、どの作句者のものにも、右諸氏の漫画が添えられている。

『新川柳講座』昭和二十三年。水武書房刊。先生朱筆校正の仮表紙、仮綴、完全な本も所持。

雑誌では、

『国文学解釈と鑑賞』昭和三十三年七月特集増大号—至文堂刊。「川柳大鑑」に（諸流の主張）同誌、昭和三十八年七月特集増大号。「川柳—その研究、鑑賞、作法」に（川柳の味について）

その他以前から所持の著書では

『川柳漫画・累卵の遊び』漫画・柴谷柴舟、昭和三年不朽洞刊。

『川柳とは何か』昭和三十四年至文堂刊
『新川柳鑑賞』昭和三十四年川柳雑誌社刊。

川柳漫画『累卵の遊び』は、昭和六年大阪朝日会館に於ける、川柳雑誌社主催の川柳大会に於て、川柳に手を染めて間のない若輩が賞品として先生直々に頂き、感激した憶い出深いものである。

なお通信販売では、極美・美・箱付等と明示されている。良心的な店もあるが、無いものの中には汚損甚だしく、又美はその通りであるが、それには上巻下巻があり、その中の一冊というような不親切な店もある。喻えば

前記の『川柳漫談』には、何等保存程度が示されていず、『新川柳講座』は、著者校正書入、とはあったが、何分にも三十年以上の古いものであり、紙質も悪く古色蒼然とし、価格は六、五〇〇円+送料で、正直に云って、実物を見てでは躊躇したことと思う。

併し何事にも例外があり『川柳漫談』は、斯くなるまでも、多くの人々に読まれていた事が偲ばれ『新川柳講座』先生校正仮綴本は、先生が書き込まれた。一冊切りの貴重なものであり、今では汚損なんかは問題外で、その巡り会いを喜んでいる次第である。

『川柳・累卵の遊び』序

× × ×

一本の撻寸が
燃えつくすまでに
寒さや空腹が
せまって来る迄に
わたしたちは
一句を遺しておかねばならぬ

★

森田布堂氏から「川柳漫談」復刊のご提案がありました。

—編集部

一人吟

秀句鑑賞

一前月号から一

河村日満

雑踏のひとりひとりに新春がくる

小島蘭幸

雑踏の中に市民が居り、庶民がいる。そのひとりひとりにこそ、新春が待たれるのだ。一國の総理にしてははしやぎすぎ

谷垣史好

黨員選挙で二位となると知っていたら、はしやぎもせまいものを。

パチンコ屋父に自由な椅子があり

高杉鬼遊

無職の僕をそこに置いてみた。上五を下五においてみたりして。

嗚呼平和女にやせる本が売れ

本多柳志

その慧眼に敬服。上五の「嗚呼平和」の、「嗚呼」の使用のうまさ学びたい。

善人の仮面で味方から騙し

金井文秋

類想句はあったように思う。しかし、上五

「善人の」がよく利いていると思うのだが、どうだろう。

大正に納得できぬ使い捨て

奥谷弘朗

ぼくも大正の生まれ、それ故に共鳴ができる。特に中七の力強いきどおりに。

傷口に触れるユーモアだってある

香川醉々

確かにそんなユーモアだってある。経験者の僕が云うのだから間違いはない。軽いウィットの中から、それとなく傷口に触れたのだが、うまいなあーというしかない。

夫と腕組んで恥かしさをもたぬ

堀江芳子

下五の力強さに好感を覚えても、さげすむ心などさらさらない。この夫婦を知るだけに尚更らである。

遺書作るほどの何かを残せしや

小砂白汀

「チクツ」と何かで刺されたような心が、この句を見直した。そして読み直して「ウフフ」となった。そして楽しくなったのだが。こめかみを打たれて帰る冬の道

高橋夕花

前の句とぐっとちがって、これは俳句的。「川柳は詩」と云ったって、もういまの川柳

家からは「NO」は出まい。しかし、俳句と川柳のちがいは、やはりはつきりしている。

と僕は思っている。人間詩だものね。寄りそうて夫婦に演技などいらす

柳原静香

「夫と腕組んで」の句とおなじ、夫婦仲の句。いい情景を想い浮かべて、こちらまで楽しくなる。どちらかという天下五「いらす」より僕は「いらぬ」の方が好きなのだ。

民芸品枯れた両手で生みだされ
塩満敏

中七の「枯れた両手」に大きく引かれた。うまいと思った。それでこの句生きた、とおもった。

三面鏡腰のまわりを太らせる

斎藤三十四

三面鏡でこそで、窺見ではそうはゆかなかつただろう。中年太りの腰のまわり。いや戦後の女の腰まわりは、一段と、とは誰かさんの発見なのだ。

父にない風は母から吹いてくる

小谷仙山

父とちがって母の愛情はこまやかだ。そのこまやかさの中に、父には無いものを感じられるのかも知れぬ。

九官鳥おんなの愚痴をくり返し

鈴木木かつ子

もの真似しかできぬ九官鳥に、覚え込まれた女の愚痴。うまい見付けに、すらすらつてきた句ではないだろうか。

その他に残った句。

ひっそりとまだ大正が居る職場

覗き窓世間を防禦した皆

真似できぬ厳しさばかり立志伝

無事な日の日記は音を立てて閉す

手紙書くきょうの若さの中で書く

本蔭棒 宵明 英詩 与史 婦美子

秀句鑑賞

— 前月号から —

香川 醉々

三面鏡三つに写る顔を恥す 辻 文平

きつと一つには心が写ったのでしようか。

ナイターが済むと虫歯が痛みだす 松本文子

逆転ホームで負け。忘れてた虫歯が痛い。

日本はいいなと正月だけ想う 川上 富子

これからいつもいい日本でありますように

わけもなく無性に腹のたつ日あり

竹内花代子

いつも神様仏様ではありませんよ。

ワntenポ遅れてユーモアだとわかり 朝倉 大拍

言った本人がっかりでしたでしょう。

夫婦して生きてる不思議を語るなり 小谷 葉子

何の因縁か、何の輪廻か。

文章にすれば恋しい人になり 田中紀美代

貰ったひとはドキリとしました。

真直ぐに生きて女のもの足らず 福本 英子

でも平穩無事もいいものです。

手づくりの料理隣りの味で来る 松川 芳子

私ならもう一寸酢を効かせますがね。

青い眼に枯山水が腑に落ちず 岩井 公平

所変れば品水るといいますから。

倒産のドックの岸に魚群れ 渡辺伊津志

造船日本もさっぱりというところですよ。

人滅らしの机に一輪菊を挿し 中森葉士人

きつと窓際の机だったでしょう。

さりげなく嘘も入れてる占い師 江副 二牛

占い師も世渡りが必要なんですね。

酒強くなつて單身赴任終え 佐々木 裕

先生もサラリーマンも同じようですよ。

咲き残る朝顔何故か俺に似て 牛尾 緑楼

何をくよくよ川端柳でしょうか。

何事も無かつたようにお早ようさん 野々口ゆう也

一晚寝れば冷静になります。

何かと云えば餅をつく故郷があり三浦ひろ坊

唐津おくんちも餅をつきますか？

雪が降る何かよいことあるように原田凡太郎

太郎も次郎も寝ました。よい夢を見ますよ

秋桜が弱い揺れをかばい合い 浦野 和子

風にそよぐ声ではなくコスモスで。

スモッグもなし正月の昼の月 堀口 欣一

環境庁長官殿も御満悦の光景ですよ。

釣船をそのまま見船とす 池田香珠夫

なんだか半七親分が出て来そうですよ。

やけ酒のとなり景気よい話 中谷 利美

元禄と天明を合わせたようなことですよ。

落陽や咳一つにも秋は憂き 麻野 秋畝

咳をしても秋畝(幽玄)さん一人ですよ。

水割りの氷が鳴って黙秘権 石井さわ子

水割りがなくてロッキード黙秘以上。

満点の父へ妻子がくたひれる 渡辺 南奉

まっさき筆者のほうがくたひれますよ。

世間見きわめて風船おりてくる 小林鯛牙子

やれやれ人の噂も七十五日ですよ。

警察大思わせぶりに喰ぎ廻り 山下 勝一

うちの雑犬どもは、寝て食つて吠えるだけ

電線が喰る豆腐が売り切れる 梅本登美也

大さむ小さむ。今宵は寄鍋といきましよう

病癒え復職の椅子こそばゆく 北野 天人

受付で貴方のお名前は？ がっかり。

鈴ひとつつけて男をためそうか 吉岡きみえ

どうやら男は猫並みになりました。残念!!

松茸をもらい買うより気を遣い 野田 君枝

お返しにダイヤ3カラットでした。

炬燵焼酔うても時価は避けている 森脇善彦

サンマなら大丈夫。一匹三百円。

髪の毛の本一本さえ恋を知り 岩本 覚子

恋人の噂全身耳になりとうとう。

白旗をいつも持つてる処世術 越村 枯梢

三十六計逃げるが勝ちと教えられました。

豊作が素直に喜び合えぬとは 木村はじめ

政治不信に落ち入りました。

無事な顔確めあって晦日そば 大垣たもつ

御同慶の至りと申しあげる次第。

総裁選どなたさまでよい焚火 桧垣 岩光

故事では鼓腹撃壤といいました。さて？

またボクの名前が残る設計圖 西本 保夫

同感、共感この上なしです。

赤信号渡る老婆を待つ笑い 花田たけ志

愛染帖

橘高薰風選

大阪市 西 出一栄
 桔野道死ぬまで歩むほかはなし
 古都の池おしゃれな鹿の水鏡
 富田林市 岩 田 美代
 昔むかしのやさしさが残る橋
 傷のない街などあろう筈がない
 和歌山市 西 山 幸
 鮫小紋ひとを捨てたい霧の街
 手をつなぐ闇の深さの安らぎよ
 寝屋川市 小 林 鯛牙子
 鏡台をどこへやろうか冬が来る
 町内で猫がもめてる総裁選
 竹原市 三 宅 不 朽
 まして悪人をやとアメ玉頬にあり
 後から見れば不動も淋しかり
 富田林市 中 村 優
 今日幕開けて黒子の妻が居て
 煙草吸う女近寄り易くなる
 兵庫県 遠 山 可 住
 お地藏さんに盗んだ柿を一つあげ
 お休みなさい球根を植え終る

金治市 月 原 宵 明
 慈善鍋ときれときれに寒の音
 戦いのまなじりとなるヘルメット
 愛知県 池 田 香 珠 夫
 整形の顔ちぐはぐに老いはれる
 アルバイトから病みつき考古学
 岡山県 浜 野 奇 童
 動揺と見られたくない手を洗う
 そろばんの中へ反対党は死す
 倉吉市 奥 谷 弘 朗
 偽物の相場も知っているマニア
 妥協点ちよつとずらして結ばうか
 八尾市 高 橋 夕 花
 より女らしくなれるブーツとコンパクト
 匂い袋をくれた人と晩秋の中
 柏原市 小 谷 葉 子
 秋から冬へと愚かな中年の時計
 夏帽子かぶって人形冬さなか
 室戸市 石 建 よ し み
 便り読む表情母がよんでいる
 諦めと希望が恋をつむいで行く
 神戸市 宇 佐 美 和 子
 一日一日別れの海が見えてくる
 寝返りを打てばあなたが妻という
 岡山県 白 岩 文 衛
 人憎むまいと思う雲を見ながら
 三角波どこで子魚遊ぶのか
 京都市 都 倉 求 芽
 影がなくなるとき一人になれる
 信じよう終い風呂にも虹の泡
 寝屋川市 江 口 度

やがてみなノアの箱舟欲しくなる
 種子を播くからすに見られないように
 島根県 角 耕 草
 胡麻叩きながら配達から貰い
 マニキュアの指が上手に柿を刻く
 八尾市 大 路 美 幸
 友達欲しい仏もきつと居る
 尾鷲市 渡 辺 伊 津 志
 出発の雰囲気を出す長い影
 高槻市 若 柳 潮 花
 アベックの数をかぞえる待たぼうけ
 東京都 山 根 白 星
 通り雨男のさがとおほしめせ
 大阪市 河 野 君 子
 下絵のままの夢で超越することにする
 和歌山市 桑 原 道 夫
 波打際のを少年踏んできた
 唐津市 田 口 虹 汀
 私は大元帥の帽子です
 宝塚市 吉 田 笑 女
 今朝も無事スタートラインに立つ夫
 青森市 工 藤 甲 吉
 赤ちゃんでなく寝たきりが居るオムツ
 兵庫県 川 井 白 峯
 通勤の女に朝の匂いあり
 倉敷市 水 粉 千 翁
 秋をはめ足らぬ熟柿になりました
 島根県 櫛 原 秀 子
 めくるめく想いの糸は切れもせず
 岡山市 川 端 柳 子
 筋一本とおして夫の所在なく

守口市 野呂右近

野呂右近

虫干しの亡母の着物の花模様

唐津市 山下勝一

守口市 羽原静歩

飯塚虎秋

和歌山市 若宮武雄

若宮武雄

唐津市 山小西雄々

唐津市 中御前

和歌山市 津田与史

梅本登美也

岡山市 清水金太郎

清水金太郎

唐津市 野中御前

和歌山市 意に副わぬ年送る酒飲まんかな

和歌山市 意に副わぬ年送る酒飲まんかな

松江市 藤森小雅子

枚方市 宮川珠笑

宮川珠笑

唐津市 野中御前

松江市 藤森小雅子

大阪市 藤森小雅子

藤森小雅子

鳥取市 河村日満

河村日満

唐津市 野中御前

大阪市 藤森小雅子

大阪市 藤森小雅子

藤森小雅子

鳥取市 小砂白汀

小砂白汀

唐津市 野中御前

大阪市 藤森小雅子

大阪市 藤森小雅子

藤森小雅子

鳥取市 藤原桜山

藤原桜山

唐津市 野中御前

大阪市 藤森小雅子

大阪市 藤森小雅子

藤森小雅子

鳥取市 黒川紫香

黒川紫香

唐津市 野中御前

大阪市 藤森小雅子

大阪市 藤森小雅子

藤森小雅子

八戸市 島田昭治

島田昭治

唐津市 野中御前

大阪市 藤森小雅子

大阪市 藤森小雅子

藤森小雅子

堺市 高橋千乃子

高橋千乃子

唐津市 野中御前

大阪市 藤森小雅子

大阪市 藤森小雅子

藤森小雅子

堺市 藤井春日

藤井春日

唐津市 野中御前

大阪市 藤森小雅子

大阪市 藤森小雅子

藤森小雅子

倉敷市 久家代仕男

久家代仕男

唐津市 野中御前

大阪市 藤森小雅子

大阪市 藤森小雅子

藤森小雅子

平田市 松原寿子

松原寿子

唐津市 野中御前

大阪市 藤森小雅子

大阪市 藤森小雅子

藤森小雅子

和歌山市 堀江正朗

堀江正朗

唐津市 野中御前

大阪市 藤森小雅子

大阪市 藤森小雅子

藤森小雅子

鳥根県 堀江正朗

堀江正朗

唐津市 野中御前

大阪市 藤森小雅子

大阪市 藤森小雅子

藤森小雅子

兵庫県 文平

文平

唐津市 野中御前

大阪市 藤森小雅子

大阪市 藤森小雅子

藤森小雅子

竹原市 岩本寛子

岩本寛子

唐津市 野中御前

大阪市 藤森小雅子

大阪市 藤森小雅子

藤森小雅子



森寿風さんを偲ぶ

植 村 客遊子

後にも先にも一人になってしまった徒姉妹が死んだと云うので大騒動をして岡山へ出かけようと云う処へ又電話が鳴った。

「保西岳詩です。寿風さんが昨夜亡くなった」と聞いて、私は「エッ」と云ってしばらくは言葉が出なかった。それもその筈、殺されても死ぬもんかと云った感じのタイプ。それに私のようなロートルではない男盛りの人であるからだ。

この人については色々な事があった。私共の川柳会は職場川柳で正式に云えば「国鉄レクレーション姫路地区川柳あしなみ会」と云って大阪鉄道管理局から年間ナンボと云って補助金を呉れる。だから年度大会ともなるとそのスポンサーが出張して来て、入選者には賞状と賞品を呉れる。その費用としては参加賞や、選者の謝礼としていくらかと、我々役

員の弁当代として少々、だから大会ともなればそれはそれは大変で、政治性もある程度必要である。

打ち明けた話が予算消化の為、各文化サークルではしのぎを削る。

あしなみ会でも詩吟もやると云う人も多くいる。そこで「サクラ」をよく使った。詩吟の会場から二、三十人サクラを引張って来る。茶と茶菓子それに参加賞が当ると云うから喜んで来た。それで私も良い格こうが出来たもんだ。そしてその「サクラ」が川柳に根をおろした一人にこの寿風さんがいる。だからこの人は私の事を「川柳屋のボス」と呼ぶ。

そんなインチキ事はばかりやっけていても指導者が良いから寿風さんも川柳塔同人にまで成長した。その蔭の力「恩人」とは「皆さんご存

知の正本水客さんである。こんなたいした人がなぜ姫路くんだりの川柳会にと思われるだろうが、現職の頃の私の上司であった関係上萬的さん杜的さん等毎月大阪から御足労下さったからだ。

水客さんは、私のような帝国尋常高等小学校卒とは違う。立命館出身の学士さんである。

文学的にその人の個性をいかせた育て方をして下さい、よって（客遊子は例外）皆さん成長が早いのだ。

寿風さんは高砂工場に勤務していた。ここは昔北川春果さんが病院長をしておられた関係上川柳は盛んで、その心棒になって今も元気でやっているのが吉原紅月さんである。

工場倶楽部には路郎先生の「俺に似よ」の軸があり、大会もよくやったものだ。

大阪鉄道管理局では予算の関係もこれありで岸本水府さんが来ておられたが、工場は局長と同列と云う関係にあり予算面も局長並で本社直轄と云う点で路郎先生をお迎えしての大会も出来貴重な軸を飾る事が出来たのだ。

こんな文化的に幸福な職場で仕事が出来た寿風さんが本当に倅であったと感じられる。謹んで寿風さんのご冥福を祈る。

古川柳現代解釈法

香川酔々

海音寺潮五郎の作品に、悪人列伝、武將列伝があります。日本歴史上で、活躍した人物がほとんどである。歴史の教科書を読むのよりずっとよく日本の歴史が理解できます。歴史に興味のある方には、おすすりめしたい作品集です。さて今回は、先人たちが、さまざまに歴史上の人物を詠んだ句をとりあげてみましょう。

能登どのはのみを逃した顔ツつき

平教盛の子、能登守教経が、源義経と一騎討ちをのぞんだが、義経は、ノミがはねるように、かの有名な八艘跳びで、他の舟に乗り移ったので、あてがはずれた。ところがどうです。現代解釈法によれば、あてがはずれたのは、教経ではなく、福田前総理でした。よもや大平幹事長に八艘跳びをされるとは夢にも思わず、天は時には変な声を出すなどと、妙なセリフで退場。おかげでデノミは選のきまりました。われら庶民の中には一円アルミ貨をせつせと溜めた者もいたそうです。だが見事

に裏をかかれたというお話、なんだか私たちがノミを逃した顔ツつきになったというお粗末な一席。

弓ながす日も鎌倉はふところ手

筆者の作品に「叩き売り見る織田作のふところ手」というのがあります。しかし、この句は筆者の作品とは大違い。スケールのぐんと大きなものです。

舞台は義経弓ながしの場です。大正以前にお生まれの方にとっては、このお話は知り過ぎるほど有名。昭和生まれの方は御存知ない方もおいでになろうと思うので蛇足ながら壇の浦だったか屋島だったか別に調べてみようとは思いませんが、とにかく源平合戦。多分屋島だったでしょう。

義経が、あやまって、自分の弓を海に落とした。義経は慌わてて拾いにかかると。平家方はこれを見て義経を熊手で、ひっかけようとする。これを払いのけながら、義経は自分の弓を拾い上げる。どうです、物を大切にす

という心掛けは見習いたいものです。ところが家来どもは、昭和元祿の私たちのように使い捨て時代。会社も役に立たない社員は窓際の机に移す世の中と同じ感覚です。義経をいさめて曰く。弓などいくらでも代りがあるではありませんか。もつとお体を大切にすて貰わなくては困ります。社長をおもう社員の内根、涙が出ます。社長いや違った、義経答えて曰く、「叔父鎮西八郎為朝愛用の弓のような強弓なら、わざとでも流して、敵に拾わせるのだが。この弓は、そんな強弓ではない。源氏の総大將は、こんな弓しか引けないのかと、拾い上げた平家の者どもに笑われるのはまことに残念至極。だから命に替えても拾い上げたのだ」と武士は死しても名を惜しむ。虎は死しても皮残す。見事なものです。人間かくありたいものです。

ところがどうです。鎌倉では頼朝さんが、ふところ手で、政子さんと御機嫌うるわしくお庭を散歩中です。余裕綽々といったところNHKでも、これにあやかって、「草炎える」をはじめます。聴取料をふところ手でいただきたいようです。現代解釈法も異議の申し立てはいたしません。田中元総理は、法廷で頑張る。武士の名を惜しみますからな。だが、ふところ手で出廷というわけにはいきませんな。

むさし坊水車程しよって出る

かの有名な武蔵坊弁慶、いつ見ても七つ道具をしょっています。ちよつと見には、水車

をしよっているように見える。「武蔵坊とかく支度に手間がとれ」なども古句は言っています。

さて、現代解釈法に従えば、この弁慶は、議員諸公や、議員になりたい諸公によく似ているようです。選挙公報を読んでごらんなさいます。公約、公約、公約、まるでサロンパスの大安売り。スーパードンブリのような売り出しです。そんな水車のように公約を背負っていると、水車どころではない。風車のように、風でぐるぐる廻らされますよ。そういうえば解散風で、またぐるぐる回る公約が現われそうです。衣川さすが坊主の死にどころとならぬよう、頼んまっせ。議員諸君、候補者諸君。

泥足で工藤が夜着をはねのける

これもかの有名な(どうも今回は有名が連発されますが、悪しからず、みんな有名ですからね。)曾我兄弟が富士の裾野の巻狩を、いいチャンスとして、工藤祐経を父の敵として暗殺した物語。建久四年(一一九三)五月二十八日の夜のことでした。陰曆のこの日は虎が雨といつて必ず雨が降るそうです。気象台は、確認していないようですがね。だが俳句の季語には、ちやんとあります。たとえば、こんな句です。

―藻汐草焼けば降るなり虎が雨 高浜虚子
―寝白粉香にたちにけり虎が雨 日野草城
だから、先人は、泥足でという表現を使っています。随分江戸の川柳家は知識人だったようです。

この句を現代解釈法ではどう扱うのかと言えば、訳はありません。いま新聞、テレビを賑わしている江川騒動です。なぜなのか、頭をかしげる方が居られるかも知れません。なかに簡単ですよ。工藤を野球憲章と置きかえて考えればいいのです。正力巨人軍オーナーは、まさに泥足で、野球憲章を踏みじったのです。金子コミッションナーは、ますすばらしい声明文を発表、翌日は、正反対の指令を出し、ファンをいきどりに耐え切れず、軟化を示しています。まだ決定はなされていません。この原稿が、日の目を見る頃は、江川氏の運命も決まっているでしょう。ところで歴史上の事実から言えば、工藤祐経は、逆うらみされて殺されたので気の毒です。曾我兄弟の父河津三郎祐泰の側に非があったようです。ここまで書いてくると、テレビの最終ニュースで、江川問題は白紙に戻すとコミッションナーが発表したそうです。まあ切角書いたのですから没にするのは止めました。

従来のイメージを破った新しい試みの句文集

川柳わかやま・句文集 「あおい海」

ご参考までに是非一読を(一五〇〇円、申込受付中)
申込先 〒640 和歌山市駕町一五 野村太茂宛

よかれあしかれ長刀も馬もあり

最明寺時頼入道(鎌倉幕府五代執権)が水戸黄門の先輩として諸国巡察したときの話。上野の国佐野で、雪に降られて、一夜の宿を乞うた家で、主の佐野源左衛門尉常世から秘蔵の梅松核の鉢の水を焚いて、暖かいもてなしを受けたという有名なお話。長刀も瘦馬もありました。いざ鎌倉に備えて、武備おこたらなりました。いざ故事を、句にしたもので。佐野の馬戸塚の坂で二度たおれ」などもよく御承知のことでしょう。

これを現代解釈法で、解釈すると、まさに有事立法です。備えあれば、うれいなし。まさに佐野の心意気です。

最明寺入道が、彼の心境にいたく感動し、これに厚くむくいたということです。いかがです。みなさん、入道が感激したように、有事立法大賛成の方は居られませんか。何に不賛成だって。そうですね。憲法第九条がありますね。お話が堅くなりました。

贈り物

津田 与史 選

仲よしが一对で来る贈り物
 びつたりと礼状がくる贈り物
 良心に言い訳して贈り物
 田を売ってから銀行から贈り物
 贈り物にするセーター午前二時
 純粋な贈り物ですとは怖い
 肩書の重さを知ってる贈り物
 上役へ贈り下役から貰い
 グサグサになって歳暮が届けられ
 下手な字が今も生きてる贈り物
 裏門が大きく開く贈り物
 だあまって叔父ポケットへ札をくれ
 贈り物のせいではないと云うききめ
 職やめた途端に贈り物来なくなり
 切りつめてつめて乙女の贈り物
 いも五貫届いて嫁に故郷がある
 何よりの贈り物過疎へ医者が来る
 贈り物とどけた足で酔うてくる
 贈り物貰いはなしと云う身分
 嫁からのリングが着いて年の暮
 贈り物気の効く奴と見直され
 贈る身に贈られる身の裏表
 贈られた喜び贈って満足す

武水 古方 本蔭 金太郎 素身郎 寿馬 虎秋 豊童 奇生 伊津志 一進 暁明 不二 綾女 規泉 規人 茶風 実人 春日 枯梢 橘亭 喜洗 ますえ

贈り物裏ありそんな貌で来る
 街の子へ土の匂いの贈り物
 童心の贈り物つい泣きました
 電波借りてあなたに贈る愛の唄
 遺族また泣かず勲章国がくれ
 贈られたお菓子で過疎は冬ごもり
 封書よりひらりと落ちた花おし葉
 贈り物シングルベルで急き立てる
 贈り物汚職の匂いさせてくる
 芋ほりのお土産ですと二つくれ
 贈り物せよせよせよと百貨店
 結び目をしかと確かめ娘に贈る
 贈り物リボンも嬉しくゆれている
 お勝手へ届く小さく贈り物
 ポーナスの重みで決まる贈り物
 ライバルに先手打たれた贈り物
 好きですと口で云えないチョコレート
 贈り物名刺代りが重たすぎ
 荒巻きをききばつたらしい贈り物
 テレビから抜け出たような贈り物
 初めての給料母に買いに出る
 一同の寸志ばかりが来る左遷
 贈り物留守の隣へよくとき
 導火線きっちり持つてる贈り物
 嬉しい日鯛が折目をつけてくる
 山の子に海から届く桜貝
 印刷の礼状が来た贈り物
 天 地 人 里 風 三 車 度

贈り物される身分によならず

雪 女

堀江 正朗 選

雪情報出番待ってる雪女
 雪国のロマンひろげる雪女
 紅筆を貸してあげたい雪女
 雪女夢に出てまた夢に消え
 祖母の口借りて吹雪の雪女
 雪女消えて足跡濡れている
 足音もなくついてくる雪女
 吹雪く夜は人里恋うか雪女
 素朴さを聞えは生きてる雪女
 雪女お地蔵さんを撫でて打ち
 雪がれない男へ雪の精きれい

悠美 勝道 勝子 優一 無勝 度人 右近 保夫 登美也 方大



川柳塔社同人の胸にかがやく

シンボルバッジ

一個 千百円

(送料共)

女性用のもあります。

川柳塔社

吟 題 課

雪女吹雪けば吹雪く程妖し 彩平
 雪女出そう炬の火をかきたせ 千代
 雪女の話に眠気去って更け 規不風
 雪女人の温みを恋しがり 枯梢
 雪女の涙は紅い寒椿 武水
 雪の精に残るいい女 祥月
 保護色の白なら似合う雪女 茶人
 メルヘンの世界に遊ぶ雪女 三車
 雪女出るぞ出るぞと児を寝かせ 豊生
 裏切りは許せず雪女が吹雪く 洋々
 雪女菊人形の匂う白 隆子
 伝説は雪を女にしてしま 一進
 山おりの樵夫が会った雪女 宵明
 窓ガラスの曇り雪女のシルエツト 早苗
 黄昏の視野おぼろげな雪女 句味地
 雪女たしかに見たと云う時 里風
 山小屋の夢にはつきり雪女 曉明
 雪女出そうなとこで話切れ 回天子
 雪女信じたままで村に老い 実
 雪女雪男ほどに騒がれず 金太郎
 雪女になってしもうていた樹氷 古方
 春つげる風雪の精地に帰る 素身郎
 雪女男やもめの戸を叩く 御前

人

雪女の話かまくらの灯を囲み どんたく
 雪女落語となれば艶に溶け 軒太楼
 雪女酒でも提げて出て欲しい 博友
 雪女でもよし本当の愛なれば 軸

立春
 節分の豆がころんだ庭を掃き 右近
 着ぶくれたまま立春の声を聞き 寛
 義足もう疼かかず立春をたらし 洋々
 立春へどこかで驚啼いている 里風
 立春の滑船底塗装する 虹汀
 立春は駆け足雨にある温さ 洛醉
 立春は寒さの峠かも知れず 暁明
 立春に流感やっつとみ興あげ 夢酔
 立春へウインド既に初夏の彩 梅風
 立春を冬将軍が否定する 堀治
 梅しかと蕾抱いてる春立つ日 古方
 炬燵から立春焼くちゃんちゃんこ どんたく
 立春へコマージュアルはもう花盛り 素身郎
 立春に歩巾が揃う宮の梅 優虎
 厄払いして立春の朝が明け 宵秋
 路の台出て立春を裏切らず 宵明

立 春

川 竹 松 風 選

立春の鬼が迷っている日柄 茶人
 立春へ春のリズムがかけてくる きく子
 永遠の夢を誓った春立つ日 七面山
 立春にまだまだ遠い雪に住み 早苗
 立春の朝は曇の豆拾う 佳雲
 立春と聞いて寒さにへこたれず 奇童
 立春の証しを園児持ち帰り 奇童
 立春は名ばかりつら長く伸び 奇童
 立春は名ばかりつら長く伸び 奇童
 立春へ雪まだ深き北の春 方大
 立春へ雪まだ深き北の春 方大
 立春は内豆がはじけてそこに春 軒太楼
 名ばかりの立春木枯舞いを舞い 翁童
 立春をまだまだ老の炬燵抱く 天彦
 立春の寺を訪ねて梅匂う 豊生
 病む母へ立春という贈り物 佳雲
 分校はまだ立春の雪を掃く 岩光
 暦では立春という牡丹雪 枯梢
 立春の声長かった老いの冬 どんたく
 立春にまだこれからの暖房費 代仕男
 立春のどこかやわらぐ冬景色 本蔭樺
 立春へ水仙去年の位置へ出る 宵明
 梅活けて妻立春の部屋にする 方大
 立春の天気予報も雪ダルマ 裕
 暦とは正直立春寒くとも 無人
 立春の日脚畳を追うて伸び 勝一
 お四国の鈴立春に春を告げ 軸

初歩教室

題「飽」

本田恵二朗

若しも私の周囲に、妻も子らも縁者も隣人も、そして友人もいなくて、全くの独りぼっちであったとしたら、どんな心境であろうかと、ひそかに想像してみたら、ぞっと寒けをおぼえて、そうなたらいさぎよく弥陀の膝元へ走せ参じるより外はあるまいと、初老の頃に思ったことがある。

川柳という絶佳の友がいるのではないかと親友の一人が云うが、川柳だけで孤独から開放されるものではなく、多くの良き友を持っているからこそ川柳が存在するのだと、その頃悟ってからの私の心境は、いとも爽快であり健康である。

友達が多いほどよいのだ。月も星も、草も木も、山も丘も野も川も、小鳥も虫も魚も、そして猛獣だって親友である。それでこそ川柳人といわれる資格があるのだと私は云いたい。それらの友達を愛情の目で眺め、それをモデルにして作句すれば、川柳人としての人格や内容が一層に充実してくるにちがいない。

い。

重箱の隅つつく能率に飽きる
落して割れぬ食器にも飽きる
介護する人飽きるほど続く疼き
かたくなに余命を月で数え

故 新川 貞祐

当教室永年の常連貞祐氏が、旧臘十三日午後七時五十分七十七歳にてご永眠との報に接したが、十二日消印で、いつもの通りの達筆の投句が私の手元に届いているので、あまりにもご急逝に驚き、お悔みの言葉も見当らぬ思いである。貞祐氏の絶筆とも思われるご投句を掲げて、心からご冥福を祈る。

美人よりおかめの方が飽きが来ず 佐代子
（おかめの方が飽きぬよと負け惜しみ）
パン食に飽きたかやはり日本人 同
（パン食をすすめた口がパンに飽き）
釣りに飽き今はゴルフに凝っている 小稚子
（釣りに飽きたのか近頃ゴルフ靴）
妻の愚痴聞き飽きていて満ち足りる 同
飽き性をどちらに似たと愚痴り合ひ 三男
（飽き性はオマエ似たアナタ似よともめ）
飽いたとも言えず下宿のご惣菜 同
（下宿屋のラーメンせめてグロッキー）
飽き性が脱サラをして運が付き 同
（飽き性が脱サラをして運が付き）
飽き家ついにげてもの屋を見つけ 御前
（飽き家ついにげてもの屋を見つけ）
飽きっぽい男が歩いた離婚歴 同
（飽きっぽい男が歩いた離婚歴）

いつまでも飽きぬ茶漬の夫婦愛
（いつまでも飽きぬ茶漬のめおと著）

雑音の中で飽かれぬ日日を編む
（暖衣飽食へ人ごとでない失業風）

静佳

飽食は豊作まだまだ余る米
（飽食へ豊作の声が追って来る）

同

飽きもせず飽かれもせずに共白髪
（飽きもせず飽かれもせずに共白髪）

同

飽きもせず飽きた牛ゆったりと目で知らず
（飽きもせず飽きた牛ゆったりと目で知らず）

同

聞き上手話上手が置炬燵
（聞き上手へ飽きもせず聞き上手）

同

聞き飽きた愚痴に耐ええる市場籠
（聞き飽きた愚痴に耐ええる市場籠）

同

姫鏡今日も見飽きた顔がある
（姫鏡今日も見飽きた顔がある）

同

聞き飽いた身上話とも言えず
（聞き飽いた身上話とも言えず）

同

長訓示聞き飽いたとも言えぬ伽
（長訓示聞き飽いたとも言えぬ伽）

同

（かわりばえせぬ長訓示聞き飽きる）
単行本読み飽き車窓のポケット瓶
（単行本読み飽き車窓のポケット瓶）

同

飽きられずなおナツマロで生き残り
（飽きられずなおナツマロで生き残り）

同

（名曲は飽きられずカラオケで生き）
暖衣飽食の徒輩は貧者の夢知らず
（暖衣飽食の徒輩は貧者の夢知らず）

同

（貧者の夢知るや暖衣飽食の徒輩よ）
飽きもせず婿婦夫随の四十年
（飽きもせず婿婦夫随の四十年）

同

（ウーマンリブの見本四十年飽きもせず）
飽きのこめ顔は人気を独占し
（飽きのこめ顔は人気を独占し）

同

（飽きのこめ顔に人気をぶらさげる）
生れつき飽き性転々と職を替え
（生れつき飽き性転々と職を替え）

同

（職転々飽き性というレットテルを貼られ）
夫

飽きられた女が歩く蛇の道 同
 飽食をしてから空しさ噛みしめる 国元頼 次
 (飽食の果ての空虚を噛みしめる) 同
 飽くことを知らぬ興味が燃え続け 同
 (飽きもせず興味の渦の中にいる) 同
 賀状書きくずれる書体書き飽きる 三和
 (書き飽きた賀状の書体ふとくずれ) 同
 支払の終わった頃は飽きた柄 同
 飽きるほど飲んで今年の厄払い 湯川頼 次
 飽きもせずラーメン食ってセールスし 同
 (飽きもせずラーメン腹ですセールスマン) 同
 飽きることなく黙々と金婚へ 紀久子
 (金婚への道黙々と飽きもせず) 同
 飽きる間もなくフアッションは移り行く 同

新緑・四国の旅

川柳塔本社親睦吟行会

主催・川柳塔社

昭和54年5月18日(金) 大阪港(21時40分)／松山港(8時25分)／朝食「かすり会館(9時)」／昼食「観光センター松山(11時30分頃)」／道後温泉(19日14時頃・青海楼で句会・宴会) 道後温泉(20日8時30分)／丸亀(11時50分)／栗林公園(12時40分)／屋敷(13時45分)／屋島(14時10分)／徳島空港(18時55分)／大阪空港(19時30分) 定員50名(申込順) 他社の方もご参加ください。(会費二万五千円) 窓口・鬼遊・岳人

(まだ飽きぬのにフアッションそば向く) 見え透いた世辞くどくと飽きられる 同
 飽きることなくひたすらな慕情抱く 寿子
 (ひたすらな慕情抱きしめ飽きもせず) 同
 聞き飽きた囁き振ったイヤリング 同
 (イヤリング同じ愛語を聞き飽きる) 同
 飽きもせず愛の鼓動へベン走る 同
 それぞれの四季に飽きない顔がある 同
 据膳に飽きて家恋うめおと旅 同
 連休をよく飽きもせず、ホ将棋 同
 凝り性で飽き性趣味を替えまた替える 同
 飽きもせず酒臭くいる三カ日 同
 人生に飽きた同士の日向ぼこ 同
 飽きもせぬ話へかさむ通話料 同

三日目のおせち料理は放つとかれ 同
 愛憎の輪廻金婚飽きもせず 露杖
 書に飽きた視点に白くシクラメン 同
 飽きたわと唯それだけの離婚の弁 同
 診察の順待ち飽きた週刊誌 慶彦
 酒の顔見ると飽きた裏正月 同
 インスタントも食べ飽きた妻の留守 同
 飽採り飽の恋を割いでくる 同
 仲人さんが欲しい飽の片思い 三十四
 (飽と飽と題を間違えましたね) 同

一分間の柳論

俳句には俳句のよさがあり、川柳には川柳のよさがある。川柳でもなく、俳句でもないひとりがりの句を作る人は、もう一度、川柳の本質とはの原点から研究して貰いたい。川柳は遊びではない。西行法師が「一つの歌を生みだす心は一つの佛を造るようなもの」と言った。人生派の川柳とも云うべき人生苦に掉して川柳に依って、よりよき人生を見出す。川柳してよかった希望が持てた、思いやりの心が出来た。腹もたたなくなるとコッ

八木 摩天郎

コッ川柳修練の旅を続けて生甲斐のある人生を築きたい。これが私の念願である。川柳道場を家を開放して三・四十年、亡き柳友が座つていた当時の面影が彷彿と浮ぶ時には、川柳を楽んで居た作句姿も浮んでくる。
 成人学校も趣味講座から教養講座になって来た。定型律を守って、ユーモラスと、リズムミカルの句を念願に、明朗な社会を築き度いものだと私は思っている。

題——都合——2月20日締切(4月号発表)
 宛先 岡山県倉敷市下津井一―九―三四
 〒111 本田 恵二郎

大 萬 川 柳

「開 幕」

入選発表

開幕へ脇役なりの自負を持つ

大阪 道子

開幕へ振り子は春を呼んでいる

和歌山 寿子

暗転で老後の幕がまた上る

富田林 優

開幕のベル遠いものとする二人

開幕のすでにドラマの人となる

人の字を呑んで開幕五分前

和歌山 和子

開幕のベルに吸われてゆく歩巾

富田林 花梢

選者 川村好郎
投句総数 三百二十九句
入選 四十四句

一輪の梅早春の幕ひらく

大阪 満津子

佳句

一年の開幕山小屋で待つ日の出

藤井寺 吸江

鳥根 耕草

みそ汁の香りに今日の幕があき

岡山 金太郎

ファンファーレ鳩本能で飛んだだけ

汗知らぬ手が開幕のテープ切る

開幕に空も花添え日本晴

和歌山 紀久子

笠岡 忠三

開幕のベルが急かせる幕の内

尼崎 利美

旭川 大柏

開幕の父子三代に沸く人気

宝塚 静馬

大阪 小雅子

華やかな開幕悲劇と思えない

和歌山 武雄

脱サラへ開幕妻は共演者

開幕を待つ母の瞳を裏切れぬ

開幕へ先代声無き声をかけ

岡山 柳子

鳥根 早苗

開幕の拍手にファンのおたかき

大阪 秀村

八尾 美幸

開幕へライブルからの孤冠り

倉敷 筒子

岡山 凡太郎

神様の拍手で三波の幕が開き

大阪 ますえ

奈良 カズエ

開幕へ今年の運を信じよう

大阪 文秋

喜代美

よき目覚め今日の喜劇の幕が開く

華燭の典人生劇の幕が開く

大阪 弘生

開幕へ地元のあと押し見逃せず

豊屋川 恵美子

人生の開幕あしたを握りしめ

出直しの一步を賭けている開幕

振り出しに戻る謙虚に開ける幕

ロングラン初心忘れぬ幕をあけ

米子 千代

八尾 美幸

人生の開幕元気な産声で

大阪 真砂

地ノ句 守口 右近

子に賭けた歳月がいま幕が開く

名古屋 枯梢

開け放しの幕に疲れた老の坂

開幕は十七音字の初日記

大阪 真砂

台本のないまま新婚の幕を開け

浜田 裕

天ノ句
今日の幕開けて黒衣の妻となり

富田林 優

選者吟

主役は交れど値上げの幕が開く

昭和五十四年度

ベストテン(二月現在)

一 優

五〇 富田林

一〇 弘生

一、五 大阪

「ゆとり」 三句以内

詳細一月号を御覧下さい。

二 花梢

三〇 富田林 一一 カズエ

一、五 奈良

締切 三月二十五日

三 裕

三〇 浜田 一二 百酒

一、五 西宮

投句先

四 美幸

二、五 八尾 一三 大柏

一、五 旭川

〒583 堺市堀上緑町一ノ三ノ七

五 文秋

二、五 大阪

以下略

★ 藤井一三三方大萬川柳係

六 寿子

二、〇 和歌山

第五十四年度第三回

「油」

三句以内 第二十六回大萬川柳大会

七 真砂

二、〇 大阪

締切 二月二十五日

二月二十五日午後一時大萬

八 右近

二、〇 守口

第四回

にて開催

九 恵祐

二、〇 堺

第四回

にて開催

一〇 弘生

一、五 大阪

「ゆとり」 三句以内

詳細一月号を御覧下さい。

▼各地柳壇・追加▲

西宮北口句会

朝山千世子報

さんま焼き火災警報鳴る文化

泉女

次号に選者・題などが決まるとおもいますが、

規定

提出句 二句(各題共、未発表のもの)

文化とは留守でも洗濯仕上げられ

総甫

たのしい旅になりそうである。さらに四國の

「風」

締切 五十四年三月二十日

橋かけて離島にうれし文化の灯

美代子

ことである。ばくは長野文庫氏にお会いした

送り先

〒684 伊丹市西野外川原11

文化祭すこしとちった英語劇

正祐

だけで、まだどなたにもお会いしていないの

発表

川柳塔勉強室会報

文化祭公民館は花ざかり

千世子

でゼヒ参加したいのだが、おそらく校正中の

用紙

官製ハガキ一枚に四句記載

文化人気取った靴を履く遺影

寿馬

ためダメだろう。松山には孫(二歳の恋人も

選衡

無記名、清記選

文化祭関東煮が売れのこる

泰

小学五年になっている) もいるのだが残念な

賞品

各題共秀句一句、佳作五句

病室のひとつ点つたまま更ける

千尋

ことである。(F)

粗賞進呈

うちの猫呼べば尾を立てついで来る

喜久甫

愛染帖誕生四周年記念

課題「水」

「誌上競吟」 川柳塔勉強室

水澄んでにしき織りなす五社の景

笑女

課題「水」 正本 水客 選

発表

川柳塔勉強室会報

落葉掃く落葉のリズム五社の秋

薫風

「川柳塔誌の同人、誌友を問わず全員奮つ

て御参加下さい) 一 廣告

て御参加下さい) 一 廣告

紅葉山人こそ知らぬ夜も燃える

薫風

課題「水」 正本 水客 選

発表

川柳塔勉強室会報

柳界展望

(原稿締切毎月末)

▼ふあうすと川柳社50周年記念川柳大会が6月3日(日)午前10時から兵庫県農業会館15階ホールで開催。題と選者は「踏む・藤田きよし」「世代・北川純一朗」「姉・鈴木丙午郎」「りぼん・平野文彦」「うたう・佐伯みどり」「静か・岸本吟一」「住む・三条東洋樹」「きれい・藤島茶六」「扉・西尾菜一」「根・増井不二也」各題2句。投句拝辞とある。なお六月二日は前夜祭。六月三日は川柳大会。六月四日は観光となっている。

▼山村祐編「詩集・一行の青春」一行詩形作品の未來

を占うに足る異色の一行詩集。一五〇頁。定価二、二〇〇円(〒共)と、「エッセイ集・一行の青春」一行詩形表現の原点へ迫る好著、二〇五頁。定価二、二〇〇円(〒共)―姉妹書につき二著作一組箱入。分売せず。発行所―〒110東京都豊島区北大塚一丁目三三―四、森林書房(振替東京8・83200番)

▼川柳公論社全国誌上競吟―第2回「海」10人選は、高村三平・ちは東北子・中村富二・佐藤正敏・雨宮八重夫・坂根寛哉・森中恵美子・寺尾俊平・那津晋介・尾藤三柳。提出句二章。3月31日締切。会費千円。〒114東京都北区栄町38―2川柳公論社。

▼「川柳」新年号の柳人登場に橋高薫風氏がグラビア三ページに登場。その他、碧欠)川柳文学(帆船欠)

▼西尾菜氏(八尾市)から「歴史の散歩道川柳吟行会」というのを12月23日梅田弥生会館で正式に発会。会長は鶴飼蟻朗氏。当日集ったのは川柳塔(菜)二十七回(吉則)天主閣(以兆)を吟書し二月中には完成することと思います。

▼折鶴(翠光)いざよい(萬楽)を、長野文庫氏が「愛楽」(傘々会(与三郎)うめだ(白虎)蟻朗の九名。この会は全然独立したものです。吟行会の予告は後のページをご覧ください。

▼野口北羊氏(岐阜川柳社)「柳宴」主幹は、一月十八日、かねて療養中のところ死去された―合掌。

▼石曽根民郎氏(川柳しなの主宰)は同誌11月号の後記へ、故橋本緑雨氏との生前の一コマを書いておられる。―窮屈な思いをしても金のこと―緑雨。

▼同人の動向△地方新聞にも写真入りで大きく報道されました。また児島地区に市立の老人の憩いの家が四カ所あって、その一つへ鷺尾川柳会の名で句碑を贈るとになり―思

▼正本水客・黒川紫香・若柳潮花三氏の句文集「我楽苦多」も第25号になった。小学校時代からの仲よしトリオがこの一書にもガッチリ結ばれている。―非売品

社 栄 公 花

富田林市富田林町24-4
TEL 07212 ③ 2064

近江砂人氏（番傘川柳本社会長）が一月十日十時半、芦屋の自宅で急逝。生玉町青蓮寺で二十二日日本葬―合掌。

ちで六月七日の刊行記念句会を待つことになった。

▼仲どんたく氏（神戸市）は第6回青樹社展（心齋橋カワチ画廊三階）へ絵画を出品（1月8日〜14日まで）中広い趣味に敬服しながら鑑賞させていただいた。

▼高杉鬼遊氏（八尾市）から一人間お互いの善意を信じ合える場を計画、仮の名を「おしゃべり庵」と称し、川柳人、日曜画家、歌人、詩人が拙宅へ集まり、損得から離れたサロンを持つことになりました。

▼このほか「喪中に付き」というおハガキをいただいたのは、辻白溪子、野坂つき子、西川誓二、草深酔升・八木千代、山根白星、小出智子、津守柳信、森尚生（寿風氏ご遺族）諸氏。合掌。

▼野村太茂津氏（和歌山）から―忘年会会は六四名の盛会でした。近く七名の新人を推薦します。

▼斎藤三十四氏（東大阪）は12月7日の本社句会で手製のネクタイ（木彫りが見事）のチャリティの売り上げ金（一万五千元）を本社の発展費としてご寄付いただいた。

▼森田布堂氏（鳥取県）から―清水一保氏が、自宅前で車事故にあい骨折（足）で入院（倉吉厚生病院）全治三カ月とのこと。一日も早くご全快のほどを祈る。

▼奥谷弘明氏（倉吉市）から―倉吉市制25周年記念・打吹川柳大会は盛会でした。兼題七題中四題の天位を日満・洋々・豊生・千代を日満・洋々・豊生・千代

▼本多柳志氏（大阪市）の義母堂ハルノ女、八十八歳の天寿を全うして、十二月七日永眠。十日告別式。合掌。

▼東大阪川柳同好会は24日6時から東大阪中央公民館2Fで開催。近鉄永和駅南側。題―苦手・朝刊・凍る・仁王。

▼菜の花句会は10日（土）六時から西郷会館（八尾神社境内）近鉄大阪線八尾下車西南へ約五分。会費三百円―兼題―尺取虫（菜選）大げさ・下火。

▼2月の句会 △

歴史の散歩道川柳吟行会

集合日時 昭和54年3月25日午後一時

集合場所 生国魂神社東生玉公園―小雨決行（雨天の場合、四月一日）

会費 五〇〇円

吟行コース ―青蓮院―鳳林寺―吉祥寺―大平寺―浄者寺―藤原家隆墓―愛染堂。

当日選者 西尾 稔・平井与三郎・岡崎はるを・籾内千代子・久保田以兆。

会場 交渉中

主催 歴史の散歩道川柳吟行会

後援 大阪市教育委員会

主 催 歴史の散歩道川柳吟行会

後 援 大阪市教育委員会

本社 一月句会

会場 金属会館

八日 午後六時

お元気で明かるい笑顔が85。「おめでとう
ございます」

十日の今宮のえべっさんのころになると寒風
が吹きささむの気温16度は三月末の暖か
である。扇子を使っている人もいる。

まず生々庵主幹のごあいさつから新春句会
の幕が開く。一よそ様からは「川柳塔さん
はうらやましいほど仲よくやっている」と云
われているが、これは皆様のご協力によるも
のである。そういう意味で常々感謝申しあげ
ていますと謙虚に語られる。「背伸び」をせぬ
というのは主幹の持論である。主幹のご健康
そのまま川柳塔は健康である。全出席者と月
間賞杯永久保持の大路美幸氏の表彰。短冊交
換もめでたくすみ、今月の主役は板尾岳人
氏。

(受付) 児島与呂志・玉置重人・塩満敏

(進行) 西田柳宏子、記録—高杉鬼遊)

出席—与呂志・敏・重人・薰風・滋雀・勝
美・好一・好啓・右近・雅風・水客・千梢・
惠美子・静歩・恒明・柳志・とし子・トメ子

・柳宏子・古方・寿馬・和子・与史・勝晴・
洋敏・形水・川狂子・亜成・瓢太・天笑・潮
花・紫香・綾女・萬の・芳川・喜美子・庸佑
・美代・生々庵・一三夫・太茂津・としよ
・英子・蘭・柳信・岳人・百酒・夕花・眉水・
小路・幸生・三十四・藻介・幸太郎・千寿子
・酔々・喜風・文秋・智子・度・千万子・翠
公・規不風・桐下・ゞ女・寿美子・誓二・一
二三・湖風・鬼遊・吸江・朶・淳一・弥生・
みずほ・あいき・宇宙太・雀踊子・頂留子・
小松園・三郎・凡九郎・鎮彦・美幸・葉子。

席題「鉄板焼き」

中尾 藻介選

鉄板焼きおせち料理にあきました
ほろにがい恋は鉄板焼きへ来る
鉄板焼きホオオばっているお人柄
鉄板焼き仲居ペラペラよく喋り
可愛いパーティを鉄板焼きでする
鉄板焼きさくばらん話する
鉄板焼きまだまだ若いこを見せ
鉄板焼きジュージュウ若い恋愉し
パーベキューに飽いて鉄板焼きにする
鉄板焼きドラマの始りかも知れぬ
鉄板焼きエビの値段が安かった
冷凍のえびは跳ねない鉄板焼き
鉄板焼きむむたらしくも蝦がはねる
鉄板焼きへ海老はますます丸くなる
鉄板焼き老母の機嫌をまた損ね
鉄板焼きビールの泡も吹きこぼれ
鉄板焼きぐらいいで知恵を借るつもり

智子 一三夫 勝晴 萬の 芳川 恒明 柳宏子 眉水 与呂志 形水 涼一 智子 湖風 恒明

月給日鉄板焼きの派手な音
鉄板焼き大きな胃袋持つ女
酒のない鉄板焼きは阿呆らしい
鉄板焼き栄養足りた口をふく
鉄板焼き母は中々ありつけず
鉄板焼きは母は中々ありつけず
よく冷えたビールが鉄板焼きに合う
鉄板焼きの匂いの中で莫迦になる
京へ来て鉄板焼きを喰べずとも
鉄板で肉を焼いている女の眼
天窓へ鉄板焼きが抜けていき
カラオケへ鉄板焼きの火をゆるめ
惚れられているうちは鉄板焼きもよい
アメリカで鉄板焼きの客となる
しょうまへん鉄板焼きのテーブルで
こうなれば鉄板焼きのせいにする

黒田節踊ってからの千鳥足
白旗を振らぬ夫の千鳥足
千鳥足本人真直ぐ歩いてる
怖いものは何一つない千鳥足
千鳥足妻の顔までゆれている
千鳥足一升瓶を手放さず
千鳥足あほらしなつて来たポリス
水溜りの月は踏まない千鳥足
千鳥足妻には見せたことがなし
千鳥足仕事の鬼と思えない
折詰もがバランスにして千鳥足
ポーナスが出たぞ出たぞと千鳥足
千鳥足別に心配していない

与史 雀踊子 勝晴 三十四 好一 寿美子 智子 潮花 鬼遊 萬の 好啓 寿馬 古方 藻介 柳下 桐信 みずほ 智子 あいき 栗 柳志 右近 藻介 恒明 鬼遊 洋敏 藻介

席題「千鳥足」

田中 好啓選

千鳥足乱数表をさぐりゆく
 犬の眼もすこし狂う千鳥足
 千鳥足女に足を踏まれかけ
 迷い子の切符を探す千鳥足
 千鳥足月が時々顔隠す
 競馬ですつたあげくの果ての千鳥足
 安心をしても捨てている千鳥足
 夕旗などもう捨てている千鳥足
 タクシーがすつととまった千鳥足
 千鳥足太郎花子は汽車に乗る
 よく見るとうちの人やわ千鳥足
 片方に鉛の靴履く千鳥足
 若い娘の方へよろける千鳥足
 労りの言葉背で聞く千鳥足
 蒸発を考へて千鳥足
 上六で小銭を探す千鳥足
 不渡り手形が雲に乗つて千鳥足
 上半身が恐妻である千鳥足
 一籽を二籽に歩く千鳥足
 右左靴の気が合う千鳥足
 千鳥足ショートケーキは持っている
 あやまりたい電柱がない千鳥足
 ベッドから落ちてはならぬ千鳥足
 うちを忘れぬ証しの千鳥足もある

兼題「気合い」

橘高

蕉風選

度 鬼遊 小松園 雀踊子 翠公 涼一 藻介 美代 洋敏 岳人 勝晴 幸生 文秋 英子 智子 雀踊子 太茂津 千寿子 右近 寿馬 静馬 惠美子 岳人 好啓

国境に気合いのこもる娘子軍
 初仕事気合いの抜けたる顔交る
 気合い負け大きい方が尾を垂れる
 銀行の前で己れへ気合いかけ
 気合い取れば何も残らぬ寡婦でした

気合いかける鉛筆を尖らせる
 気合いなどかけずその日を僕のまま
 裂帛の気合い道場は寂として
 酒を酌いでくれ気合いを入れてくれ
 生甲斐もないと気合いを笑われる
 月曜日気合いのぬけた判を押し
 母の掌がこそばゆくみる子の気合い
 春駒の気合い若草踏みする子の気合い
 祖父ちゃん気合いを笑うほどになり
 商談に気合いが乗れば酒も出る
 気合いだけではもう動かない定年後
 走る子の気合いが白い息となり
 裂帛の気合いとならぬ温い冬
 お元日日本海が気合いかけ
 新年の気合いはみ出しそな賀状
 鏡から気合いがかかる失意の日
 ゴキブリの気合いにおとこ負けている
 ホイッスル鳴るとはいつてくる気合い
 執金剛の気合いに周囲陽炎いぬ
 学校で親も気合いを入られる
 風邪を引いているのに気合いだけ入れる
 婚約成立気合いの気合いだけ入る
 嬌然と構える女に気合い負け
 劣勢と書かれて気合いみなきらす
 こつちまで気合いが入る奴がくる
 真直ぐに歩む気合いの白い杖
 必殺の気合いへ西瓜知らん顔
 紫の色の気合いが分りかけ

兼題「未」

正本 水客選

美代 凡九郎 吸江 梨江 吸江 柳志 重人 紫香 百酒 トメ子 与史 与史 翠公 与呂志 幸太郎 千寿子 幸生 水客 芳川 好啓 涼一 藻介 あいき 形水 庸佑 天笑 としよ 弘生 蕪風

逆光へ泰西名画となる羊
 年賀状羊が食べたわけてなし
 仔羊の追いつく脚はユーモアで
 岐路に立つ羊は群れに寄り付かず
 セロファンを食べた未の腹工合
 暖冬異変未も脱ぎたくなつてくる
 ひつじ年ちよっぴり妻をたてておき
 すき腹へ響く鳴き声出す羊
 トラ刈りにされ降りても羊気にとめず
 翳雲の群か降りて来た羊
 はぐれ羊をじつと見つめている鳥
 群れるのが好きで羊の目を信じ
 独裁者羊の群の真中に
 日本の夜明け未はまだ眠り
 ツノ曲げて羊は堪える日が多し
 スクラムを組むと勇気が湧く羊
 洗面をつくれぬ羊メエと鳴く
 あんまり素直だから羊の瞳を怖れ
 政治論羊の角を武器にする

どんたく 涼一 梨江 与呂志 好一 涼一 百酒 翠公 文秋 美代 度 太茂津 醉々 芳川 夕花 湖風 惠美子 生々庵 太茂津

53年度の全出席者は二十八氏でした。
 順不同ですが雅号を発表いたします。
 岩本雀踊子・笠原吸江・柴田惠美子・
 金井文秋・島居百酒・戸田古方・中川滋
 雀・野村太茂津・村田飄太・宮尾あいき
 ・北勝美・西川誓二・大路美幸・江口度
 ・藤井一三・橘高蕉風・横地雅風・板
 尾岳人・香川醉々・河井庸佑・松本涼一
 ・高杉鬼遊・那須鎮彦・神谷凡九郎・津
 田与史・菊沢小松園・小谷葉子・不二田
 一三夫(敬称略)

(児島与呂志)

ひつじ飼いの群を信用せぬひつじ
未歳ひつじに鈴をつけてやる
落ちこぼれなどは羊の群にない
しんがりの羊でデ・イ・チ・イ他所見する
メロディを聞かすと羊目をつむる
何のためにあるのか羊の角曲る

兼題「屠蘇」(野郎氏代選) 菊沢小松園選

日本暗れ仕切り直しの屠蘇を酌む
核家族屠蘇にミリンが利きすぎる
子と孫の中にうつつむ屠蘇の酔い
警察も下をうつつむ屠蘇機嫌
屠蘇どころか国旗も出さぬ世とはなり
女房も未で屠蘇に頬を染め
トソの膳外遊中の子と思う
屠蘇祝う朱ぬりの盃は記念品
屠蘇汲んで怒らぬ父になつて居る
屠蘇機嫌で立てた計画だから消え
屠蘇機嫌だから済まぬことになり
美しい人美しくなるお屠蘇
屠蘇祝う時だけは父の座がある
屠蘇機嫌世間が広う見えてくる
紅白が済んだら屠蘇の用意する
屠蘇機嫌言いたいことを言うて去に
屠蘇にはまだ憧れがあり老夫婦
お年玉狙うチャッスは屠蘇機嫌
門松から屠蘇酌む形も父のもの
屠蘇の味明治生れの語り草
屠蘇祝う旧家の門にある温み
父の背を追い越せ屠蘇を酌いでやる

鬼遊 酔々 形水 和子 規不風 水客

枯梢 弘生 どんたく 優江 眉水 芳川 鎮彦 紫香 文秋 藻介 藻介 与史 英子 一三夫 庸佑 吸江 鬼遊 右近 幸生 鎮彦 雀踊子

かすのこも買えたゆとりの屠蘇である
美しい言葉で屠蘇を酌いで立つ
屠蘇機嫌みな善人の顔ばかり
頑なに昔を曲げぬ屠蘇のあと
屠蘇機嫌で引くおみくじが吉と出る
屠蘇の味女系家族の養子です
失言はもう許しませぬ屠蘇がさめ
屠蘇を酌ぐ妻は女に立ちかえり
まわり道ばかりしてきた屠蘇の味
屠蘇をやや疎んじ男の下り坂
屠蘇うける朱盃の底にある家紋
初芝居屠蘇の匂いは許される
まだ屠蘇が匂う女で戦わず
屠蘇酌んで別れる日など思わない
屠蘇揃近郷切つてという旧家

兼題「丘」(岡) 西尾

古賀メロディ歌った岡がそこでない
丘一つ越えれば青い鳥もいる
丘へ来て男は上らねばならぬ
人妻の迷い砂丘に埋めてある
海鳴りは哀しき丘の流人塚
雑兵に見られたくなし丘に住む
飛鳥路は何か出そうな丘ばかり
丘を越えて来て焼香の順を待つ
仔羊よ迷うな丘に陽は昇る
今はむかしの丘に陽は昇る
仲間はずれにされて夕日の丘に居る
土筆摘む丘に母娘の唄がある
削られた岡に神話が消えて行く
異郷の丘にも母さんの声がする

美代 水客 萬客 萬客 萬客 雀踊子 弘生 与史 水客 好啓 潮花 涼一 弥生 好啓 小松園

優梢 枯生 湖風 湖風 翠公 吸江 柳志 勝遊 鬼明 恒明 喜風 和子 川狂子

懸命に過去を生きてる丘が好き
丘炎えて青春はるかな夢を追う
過去を振り切る丘を駆けおける
丘に住みいささか四季に近くなる
万葉の丘で呼びます好きな人
叱られた泪であおく光る丘
丘の上お伽話の家が建つ
海鳴りの丘に羊は草を食み
丘に立つ男で野心持つている
それにしても羊ヶ丘という名前
牛の鳴く岡もロマンも消え果れて
牛の言葉も丘が呼んでるちぎれ雲
丘もなし赤い郵便馬車もこず
冬の丘さみしがり屋の風の唄
神々の天下る丘花を見ず
文学を論じた故郷に丘ひかる
菜種咲く丘から初春の桜鳥
狼も羊もいます丘の上
丘越えて民話の鬼がやってくる
丘一つむこう半値に近い地価
大臣ものぼれ国後見える丘
鳥取砂丘ここはカメラの佇つところ
丘ひとつ女工哀話を抱きしめる
あの丘で夢二が見てた異人船
丘越えて長持唄と寒椿
花の咲く丘へ上れぬ過去がある
屋敷したうさぎがいそぐ丘もある
丘の名前が倅米軍の的でないか
ふるさとの丘米軍の的になる
東山魁夷が画くと白い丘

美代 夕花 鎮彦 鎮彦 弥生 寿馬 和子 静歩 雀踊子 藻介 太茂津 太茂津 好啓 萬客 水客 恵美子 夕花 雀踊子 小松園 度江 吸江 好啓 一三夫 岳人 敏生 水客 藻介 岳人



▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21日以内。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

川柳わかやま百号記念川柳大会

(於・新和歌浦万波楼、三才発表)
席題「音」 高橋 幸代選

人音もなく降る雪にさえ積る意地 大輪
地いくつもの音を知ってる白い杖 大輪
天神主が打つかしわ手の丸い音 藤村 幸代選
人もみを焼く煙に里の秋ゆたか 藤村 幸代選
地収穫のあとと海外旅行など 三碧
天足で稼いだ票の重さを積み重ね 雀踊子
兼題「百」 大矢 十郎選
人百人一首しばし昔の恋に触れ 富子
地愛一途百も承知の道を撰り 寿子
天人間に百点はない目をつむる 千万子
兼題「波」 深日白光子選
人波風を受ける岩になる女 富子
地岩に散る波の情熱さをねたむ 富子
天流人舟波のしぶきは涙かも 雀踊子
兼題「太」 河内 天笑選
人中年太りそんな言葉が背をなでる富志子
地太っ腹見せて引込めようがなし 紀川

天アア平和国は空しく太りだし 紀世
兼題「茂る」 岩橋 芳朗選
人草茂り愛の軌跡を見失なう 紀世
地茂みから「居たよ」と冬へ柚の顔 公子
天茂りたい根つ子去就をみきわめる紀 世
兼題「寿」 野村太茂津選
人長寿国豚をどんどん太らせる 道夫
地真ん中に書く寿の座り良き 和子
天満ちくる祈り寿の字の岩田帯 光代
駒つなぎ 里 小路報

岸南柳追悼句会

ハネムーン飲ませた妻の顔の艶 儀一
南風路地の奥にも春を告げ 善信
顔に艶が出て来た回復期 誓二
加茂川の岸の笑顔が離れない 規不風
みこの酌上戸も堅く盃を乾し 柳風
差し向い男が酌をする未婚 柳信
老妻が酌ぐから二級でも美味い 千代三
ボーナスが妻にちらちらしてる酌 育園
仲間の死誰も語らず酌む屋台 桐下
酌をして肚の底まで知って居る はやを
とも綱をしつかと岸につなぎ止め 勝美
手形切る男の顔に艶がある 岳人
臆面もなしに素面で艶話を 小路
生きている自信が肌艶を持つ 鎮彦
余生猶生き甲斐を知る顔の艶 柳宏子
高層に南の陽ざし盗まれる 綾女
十二時にお早ようのミナミに住み馴れる 信治
猫柳私に刺激のない焦り 美代
岸近く尻持ち上げるかいつぶり 石捨
公園の柳も芽吹き恋を待ち 宏子

柳の芽まだ冬眠の亀の池 恭太
浮き沈み知ってる柳にたたかれる 摩太郎
柳老いてしなだれ掛るものもなし 小松園
いずも川柳会 草丘報
通勤のラッシュへ乗る背押しこまれ 櫻原孝子
飛び乗れば故郷へ帰る汽車なるに 青湖
また一人過疎を離れるバスに乗る はじめ
袋帯蝶々結びがよく似合い 正江
夫婦して袋にしまう数え唄 流石人
ハイキング汚さぬ袋持つて行く 孤呂二
あくせくと教えぬ農を捨てられる 鐘堂
白杖の先が教える塾の灯が明かい 追原秀子
落ちこぼれ教える塾の灯が明かい 栄
その先をそつと教える思いやり 代仕男
突き離す言葉にこもる思いやり 軒太楼
勝ち取った要求物価に吸い取られ 虎秋
子育ての太い手に乗るパンの耳 正朗
飛び乗った汽車反対に動き出し 草丘
愛と言う袋がしばみ過去となり きみえ
想い出は亡母が教えたかがりまつ 夢酔
思いやり反抗児には通じない 芳子
思いやり何んにも言わぬ笑顔だけ 緑之助
富柳会・菜の花合同吟行句会 鬼遊報
いのちの里とは思えぬ台所 百美
酔うたふり小さな野心をよませる 右近
パチンコの腕は莫迦とも思われず 形水
豚になるぞと猪 子を叱る 重人
馬鹿バカ莫迦男がいる女がいる 鬼遊
美しい標語をトイレで読んでいる みずほ
莫迦莫迦と女の髪が胸に来る

一本の枝で遊べる田舎の子
 大晦日莫迦莫迦しくも逢うている
 美しい国の手紙は雪になる
 忘れてた莫迦がよこした年賀状
 ローソクの長い恨みが芯にある
 繁昌ののれんの隅に莫迦がいる
 指切りの指がいまでも美しい
 日雇だから酔える権利も主張する
 娘の日記バカバカバカと書いてある
 遊んでるようにも見える見張り役
 銭があるので莫迦にしておかず
 島紬なでる指先酔うている
 紋付で猪首の叔父が取りしきり

幸生 薰風 岳人 小路 寿馬 弥生 醉々 柳信 花梢 小松園 柳太 美代 栞 河原みの報 柳ささやま 二か平 百合子 緑村 越山 テル 水 枝葉 文平 可住 近江 みのる ゆきお ひとえ 靖子 踊り也 杜的報 美穂

雑草に眼を覚させる曼珠沙華
 一つずつ剣がされ市電の石畳
 冷えが来てあわてて障子張り替える
 石段の湿りに城の声を聞く
 欠茶碗洗いつづける寡婦の意地
 明治村おもいづおいに秋暮れる
 その昔は薔蕪の里ダムの底
 薔蕪の厄日と思う針供養
 塗着へこんにやく逆らう術を知り
 木の芽和えのコンニャクどこかに京訛
 お任せをしますと流石に一步退く
 不況ゆえ蔭ではびこる十一の利
 十一月書店へ並ぶ新春号
 オーエスケー川柳会 大坂 形水報

潮花 紫香 佳丹子 求芽 明代 飛鳥 芳子 杜的 万的 水客 弘史 誠三 幸坊 哲行 亜也子 前田 栄一 千夢 博泉 一扇 光夫 野生 みどり 亜成 聖地 岳念 形水

恋してる猫に乱れている独り
 スリッパにけずまかれる朝の猫
 母親を恨んだ野良猫母になり
 どんぐり川柳会 谷垣 史好報
 墓石みな四角に濡れるきつね雨
 箆の中で芽を出すジャガイモの抵抗か
 こじれてもこじれても在る夫婦仲
 箆の鳥自由にさせて嫁ぐ朝
 やさしさを四角い紙が鶴になり
 丸い石四角い石をさげすむか
 中華料理最後のいもは子の土産
 四角い顔ではへのへのは書けません
 嫁の意地四角い逃げ場残してる
 お喋りは自由心のネジを巻く
 花束をとくとと四角な嘘が出る
 探しても自然に四角などはない
 父という立場で座る真四角
 四角張って構えられると切り出せず
 十二月四角い面をつけて来る
 川柳たけはら 森井 善居報

弥生 入仙 好郎 醉々 サヨ 吐来 鬼遊 薫風 吸江 弥生 真砂 喜風 憲祐 勝美 小松園 颯太 史好 政巳 西合 英詩 貞子

川柳塔柳箋

一冊百五十円
 送料二百円

サンダル履いたまま秋の風という
 そろばんがすめば園医者がまつている
 秋晴れへ飛んだけ飛んでけいやなこと
 がらくたを集める生き甲斐だつてある
 天皇の自画像バックに色が無い
 時計コチコチ私も急がねば
 心きまる真赤な夕日落ちやらす
 小春日を夢はじかせて陽が匂う
 コモスの幻想空をつきぬける
 常識を笑われ蜘蛛の巣がこわれ
 人間のかなわぬ知恵で四季動く
 あるときはねつりからむ屋の月
 二つ違い双生児みたいな子の寝顔
 父になるうれしさ市場籠をもつ
 誕生日までにと急ぐ娘の編機
 相談に来たのにけんかして帰る
 寝て食べて罰があたらんのが不思議

城北川柳会

東大を計算に入れて子を育て
 計算に弱い女がよけ仕え
 計算をした手土産を用意する
 老後まで計算されたプロポーズ
 親馬鹿は子の計算を疑わず
 計算に強い男で恋は逃げ
 損得を超えた善意に励まされ
 筆算の誤り暗算で正される
 計算を間違え赤字黒となる
 計算に入れてなかつた人も来る
 家計簿にない衝動のショッピング
 計算は合うのに財布の銭足らず
 人数に分けた余りは口に入れ

千代美 小三紀 小六愛 菁居 のぼら 一路 鈍舟 紫光 寛子 文晴 節夫 不朽 敬子 蘭幸 房子 かつ子 静水 川口 弘生報 鬼遊 としよ 満津子 右近 千子 三十四 道子 弘生 秀村 ますえ テルミ ふうみ 行有

計算が合うてうれしい年の暮れ
 お隣りの生活を計る趣味をもち
 預金帳何年先にマイホーム
 羊毛に包まる幼な子天使のよう
 踏み切りの赤白の旗消えてゆき
 南大阪川柳会 中川 滋雀報

だまされてあげます下手な嘘だから
 偽らぬ夫婦となつて濡れてくる
 偽らぬ鏡が憎くなつてくる
 慰めた言葉に偽りだつてある
 間違った主張が机たたいてる
 銭かかると主張少しかえて見る
 下積みの主張に汗が匂つて
 バランスをくずさず妻がついてくる
 ひよつとことおかめバランスとれて
 バランスに墓穴のぞく管理職
 後悔のポケットの底でなる小銭
 妻の掌に戻れば働き出す小銭
 小銭貯めて老母に小さな夢がある
 立飲みの小銭が生きる釜ヶ崎
 見得を切るまではよかつた化けの皮
 あつちこつち切つて日曜大工済み
 封切ると母のおいがこぼれ落ち
 バッグになつても大口あける鰻の性
 銀行のバッグ心も入れて持ち
 バランスの上に原子が狂い出す
 川柳後案(岡山市) 井上柳五郎報

黙認の瞬間からは伏目勝ち
 真似をする子の道楽は黙認し
 友情の黙認遠くから見つめ
 黙認したと言わぬ目が涼し

きくみ 畑斉 喜洗 ハルエ 一休 憲祐 滋雀 静香 勝美 千梢 弘生 思月 誓二 柳信 好一郎 好一郎 凉一 恒明 文秋 鎮彦 頂留子 喜風 小松園 郎報 博友 定平 照路 恒洋

自分には無害黙認すると決め
 不孝者亡くなつて知る親の恩
 恩人へ律義の歳暮まだ続け
 大学を出た子が恩の字も知らず
 愛の鞭優勝カップで恩返し
 年末を謝恩の美名で売りまくる
 あの時の恩が拒めぬ保証印
 投稿がまた速達の世話になり
 あつけない中味の解る速達便
 吉報の速達野良まで届けられ
 速達も普通も巡航船で着き
 たばこの輪出来て妙案道ひらき
 吸いがらは愚痴と一緒に捨てられる
 せわしきはたばこくわえたまま喋り
 鳥捨てる決意タバコの輪をくずし
 川柳化粧檜 植村 客遊子報

佳句地10選(前月号から)

奥谷 弘朗 選

痛い目に合うて親父のありがたし
 危ないと思う予感ほよう当り
 告白の言葉どこか芝居めき
 女には過ぎた氣骨を惜しがられ
 美しく生まれ祇園の水に合い
 ゴ口寝する眼に天井が問いかける
 昂ぶりを押さえ時雨に濡れるまま
 花嫁の父には憎い婿である
 勿体ない水の流れて墳墓の地
 姉の傷誰もふれずにいる茶の間

亜成 柳宏子 好一 べ女 水客 凡九郎 太茂津 弘生 静水 フクヨ

味噌汁の野菜もペランダ作つて
客の顔やつと覚えたる赴任
もう一人の女へ女鏡見お茶に
これだけ話を変えお茶にする

たまに嘘ついて夫婦の愛保つ
地下街を流れる水に詩がない
下取りもきかずお医者に身をまかせ
終が落ち時刻表にらみ飲み直す
その人を意識している花鉄

川柳しんぐろ

川上

大輪報

小さな体験の奥に積み重ね
体験談脳裡に過去が甦える
体験が無字の父のよりどころ
泣いた日もあつた体験今は生き
子が解いたクイズ夜中に考える
G&G俺にも解けた一〇〇万円
アップダウンクイズその何人生譜
札束の夢をクイズにからかわれ
答えの無いクイズ夫婦で解きつづけ
パーゲンを一早く知る妻の感
愛一途女の素顔を知る日記
余るとは知らず案山子は雀追う
知らされぬカルテはドアの陰で泣く
人生の有事に堪える達磨です
人生を由けらにする有事論
核の道あゆむ有事へ自衛論
論じたて有事を避けて墮降る
そなえても愛はいきえぬ有事論
有事聞く子等は経験ない耳で
有事論陛下は何と思召す

和歌山七面句会

中筋

三幸報

岳詩
秋月
実男
奮水
越山
紅葉
葉香
永楽
客遊子
大輪報
深水
大輪
勇太
冬花
緑楼
祥月
武雄
幸子
富子
正治
寿子
利凡
はじむ
与史
希久志
守城
平城
すみれ
まさ子
十郎

坂下る彼の背中を見る窓辺
約束を忘れなはれとバーのママ
約束のこゆびと子指茜雲
約束も八方美人にするで忘れ
約束を律義に守る性で癒せ
窓越しの恋ならたかが知れている
好きだから約束せずにかえるなり
賑わいが去つた公園はぐれ鹿
にぎわいに背をむけて佇つ十二月
約束の場所いつからか暗くなる
約束へ二つ返事が頼りない
懸命にタイムの秒に挑むなり
窓の空私だけのキャンパスよ
女房とうかつに約束もうしない
窓開けて音今日又始まつた
窓開けて喋れば女気が変り

和美
光治
葉津子
富子
淳子
寿子
知也
周穂
わか
フクヨ
幸雄
一美
昌三郎
宣子
三幸

川柳高知
先人の足跡しのび旅に出る
皇軍の足跡悲し敗け戦
板の間の足跡ママの独り言
箒目に足跡残す寺の朝
街頭の募金へ見栄の手も交じり
蓮の花泥にまみれぬ花を見せ
恋文を焚けば金木犀の花
現金を掲げ御屋で値を叩き
札束へくちびる薄き女の眼
現金の欲しさ客に負けている
入院が長く爪切り買うてくる
人妻となる日の爪を丸く切り
沢庵を刻む娘のマニキュア
蝶哀しむくろをさらす秋の風

川竹

松風報

海州
紀人
菊野
幸恵
松風
桂果
青果
美和子
登子
節子
久江
天花
克耕
三幸

川柳塔誌・兼・席題課題表

(創刊号より52年11月号)

(一路集)

「ス」スポーツ・隅・スマート・スモッグ・スリッパ。

「セ」セールス・生・歳暮・聖人・清・青春・成人・正論・勢揃い・世界・席順・赤飯・石鹸・背伸び・青広・蟬・セメント・世話好き・世話役・忙わしい・選手・宣伝・善意・先手・先着・先生・洗たく・線・善意・前歴・前後策

「ソ」空涙・相談・走馬灯・瘦身・総理大臣・雑煮・象・造花・速達・底・底抜け・粗品・育てる・備え・空・空の旅

「タ」タイトル・退屈・対談・台風・体験・大役・ダイヤル・大安・大都市・大工・大学生・代書・代読・代表・台所・耐える・宝・宝くじ・高台・高望み・滝

・妥協・タクシ・竹・立ちぬけ・助け合い・惰性・疊・叩く・だし読み・達筆・建つ・起つ・発つ・脱・立てひざ・七夕・谷・他人・旅人・ダブル・食べる・珠・ため息・タレント・丹念・誕生日・短冊・ダンス・団地・暖房。

「チ」地位・知恵・近い・地下鉄・力仕事・地震・父・父の日・地図・千歳・乳房・チャック・チャンス・茶柱・茶の間・注射・駐車場・長男・長身・長髪・鈍子・蝶ネクタイ。(この項未完)

榎谷 寿馬

貫録に遠く貧乏ゆすりする

バックした夫婦漫才のテレビ消す

しつけ糸母の言葉を抱いて嫁き

献灯もとどかぬ所に石仏

神様にすがる弱氣を抱いて寝る

うみなり川柳会

大塚

豊生報

横綱にむかひ小兵の面構え

倅せがここにもあった日向ぼこ

母の趣味へ合わす土産で子は戻り

子を思う母は坂道登らせる

還暦の集い互いに子の自慢

中年の坂をひたすら登る日々

夫唱婦隨時には俺としても折れ

容見に立てば悲しみなど忘れ

果立させたコタツで老婆と背を丸め

お世辞でも聞けば嬉しい娘の器量

趣味に生き若さを保つ今の幸

開通の花火歴史を告げて鳴る

ほこほこと熱爛腹から利いてくる

勲章と云うクサリにつながる

開通のくす玉借金など知らぬ

坊さんも趣味を持つてる安来節

勲章がまだ生きている祖父の胸

七五三孫石段の数かぞえ

暖房がすぎて湯豆腐ははずまない

叙熱いま夫も居ぬ灯へ戻る

紅川柳倶楽部

(唐津市) 新潟回天子報

支那街は爆竹の音に春を告ぐ

職業欄空けてあるのは無職なり

統合の話に子等の数を読む

テレビ見て子等に未来への夢を持ち

紅雨

恭一

泰章

窓花

秋翠

豊生報

天人

冬扇

とし江

美智子

住女

萬兩

茶人

保子

節子

長波

富美湖

豊生

一汀

帆雀

雄人

盛桜

熊生

吟人

無人

源太夫

五木

ひろ坊

夷光

岩光

どこまでが歌か踊りかデビュウの子

新暦は立春ながら雪の朝

涙ぐむ白きそでふり田舎みち

贈られた化粧廻しの土俵入り

雪むすめいつく家なしここの冬

霰降る八日の寒さ今も尚

家計費の残りは妻と半半に

休日急病医者の有難さ

虹を背に男は屋台車ひく

巨いなる岩を神とし浪の花

宮詣の子よりも母の長化粧

倉吉打吹川柳会

奥谷

名月に向えば優しい母の顔

人情には遠く養老院の窓

いたわりを振り切った日の軽い悔

真打は長屋住いで足りている

小休止したい風邪がこじれだし

又とないチャンスに与えられ

指輪だけ光り知性がついて来ず

チャンス見て母に紹介したい人

総立ちのチャンスが続く甲子園

人生の余白を埋める旅日記

いたわれつながら老の坂

ライバルのミスいたわるが口と腹

老の日々いたわられるもなお淋し

オルゴール正直同じうた唄う

正直に申し上げて罪は罪

雑草でいい正直に生きる汗

正直な椅子は回らぬ平社員

正直に述べてから犯人よく眠り

人情にもろく政治家には向かず

勝中

畑中

一村

一竿

笹

久仁於

義美

掬治

虹汀

照沖

回天子

弘朗報

春満湖

独歩

おさむ

石花茶

自然

登美也

雄々

紫泉

舍人

とめ子

律子

常生

知恵

秋女

俊子

ベ女

アキミ

柳風

弘朗

・募 集・

四月号発表表 (2月15日締切)

川柳塔 (10句) 若本 多久志 選
 水煙抄 (10句) 川村 好郎 選
 愛染帖 (3句) 橘高 薫風 選
 課題吟 (各題5句以内)

「新顔」 若宮 武雄 選
 「すすく」 島田 雄峯 選
 「転期」 大鶴 喜由 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

五月号発表表 (3月15日締切)

川柳塔 (10句) 若本 多久志 選
 水煙抄 (10句) 川村 好郎 選
 愛染帖 (3句) 橘高 薫風 選
 課題吟 (各題5句以内)

「新緑」 大峠 可動 選
 「男の子」 保西 岳詩 選
 「飾る」 島居 百酒 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

常任理事会は2月2日 5時から

本社二月句会

日時 二月七日(水) 午後六時
 会場 金属会館

南区巖谷東之町10番地
 地下鉄堺筋線長堀橋下車東スグ
 電話 271・3935番
 柳話 西尾 栞
(今月の出題・児島与呂志)

兼題 「無礼」 「突如」 「迷路」
 席題 二題 当日発表
 会費 三百円
 ☆投句だけの方は切手百円封入
 大岩中 大路美幸選
 岩本雀雀選
 大坂形水選
 各題三句以内厳守

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
 大阪市南区巖谷中之町20

川 柳 塔 社

3月の兼題 「お水取り」 「厄日」
 「幼女」 「内緒」

本 社 句 会

2月7日(水) 6時 から
 3月7日(水) 6時 〃
 4月6日(金) 6時 〃
 5月7日(月) 6時 〃
 6月7日(木) 6時 〃

常 任 理 事 会

2月2日(金) 5時 〃
 3月2日(金) 5時 〃
 4月4日(水) 5時 〃
 5月4日(金) 5時 〃

☆誌代が切れると送本を中止いたします。

定 価 四 百 円 (送料29円)
 半年分 二 千 五 百 円 (送料共)
 一年分 四 千 八 百 円 (送料共)
 昭和五十四年一月二十五日印刷
 昭和五十四年二月一日日発行

大阪府南区巖谷中之町二〇番通
 編集兼 藤原 童心 社
 発行人 中島 蓬太 郎
 印刷所 藤原 童心 社
 郵便番号 542
 大阪府南区巖谷中之町二〇番地
 発行所 川柳塔社
 電話 大阪・二七一三九八五番
 振替口座 大阪・三三三六八番

・ペンペン草・

遅配無情

★新年号は12月26日に発売されたのに、同じ南区で十日間以上もかかった。新年号発送の日も、同じ南区で十日間以上もかかった。新年号も早くお届けしようと思っただけで、水泡に帰した。毎月のことながら大坂形水氏の好意で、暮れの忙しい時に車を回わっていたのに、なにもかもダメになってしまった。

★本号の原稿は早目に手を

肉体疲労時の ビタミンB₁補給に アリナミンA

☆筋肉痛・肩こり・腰痛・神経痛の緩和にも
☆アリナミンA25ミリ錠のほかにも5ミリ錠



打ってオール速達、または直接届けていただいていたので1月中旬にお手元へ届くことと思う。

二代目さん

★川柳に出てくる二代目は不肖の子が多いようだが、「川柳わかやま」の二代目さんは立派。初代の垂井葵さん同様、野村太茂津氏もまた熱血漢である。和歌山は「川雉」時代から不毛の地とされてきた。ところが今では「川柳わかやま」だ

▼葉子コーナー

▼歳時記を読みますと、二月を余寒というそうです。余寒が厳しいか、暖いかで昔から桜の開く時期に影響するといわれ、現在も開花予想データの根本になっています。

▼時々、わが家のベランダに鳩や雀が来て寒さに背を丸めて私の前で羽毛をふくらませます。羽毛の下に入らされたらさぞ心地よいだろうなあ。

▼しみとおるほど冷たい余寒の朝の空を眺めていると気が引き締まり、鳥のようにシャンとしてくるのです。

けでも同人十七氏（近く七氏増加の予定）をかぞえるようになった。「七面句会」と「しんぐう」を合わせると、和歌山は実に三十人からの同人を擁する新興勢力となる。

★野村太茂津氏の、純粹の愛社精神には頭が下がる。誰かが誌友をふやし、同人を推薦していただけないと社はしぼんでしまう。一同人一誌友獲得へご協力のほどを。

三代目

★11月14日浪曲の三代目吉田奈丸丸師が亡くなった。環状線桃谷駅の近くで、旅館「すゞか」を経営していた。この人とは駅前理容所でよく会ったし、社へ出る日はかならずこの「すゞか」の前を通って行く。奈丸丸さんは浪曲ファンならご承知とおもいますが、二代目奈丸丸師（吉田大和の丞）の弟子だった。歌舞伎の先代中村鶴治郎同様、関東からだれが来ても番付は座長だった。この三代目のもと兄弟でしの吉川朝一という狭客（いまでは暴力団という）が経営する印刷商会にぼくが二十年近くいたことは何度も書いたが、三代目奈丸丸は片肺だったのに、その美声、節調は天下一品だった。八十歳の高齢だったが、そのようなひつかりがあつたので親戚の一人をうしなつたような気がした。

★映画俳優の佐野周二氏も昨年暮れの二十一日に亡くなった。松竹映画は蒲田時代から男優トリオで売り込んできた。佐野周二氏はその三代目トリオの一人だった。

★初代トリオは、諸口十九（つづや）、岩田祐吉、勝見庸太郎。二代目は鈴木伝明、高田稔、岡田時彦（原荷子の父）。三代目が上原謙、佐分利信、佐野周二だった。ついでが、四代目は岡譲二、江川宇礼雄、佐田啓二だった。このあたりまでは、松竹は東宝や日活を押え、日本映画界に君臨していた。

★佐野周二は酔うと、よく自分の売り込みをやつたそうだが、この人の場合は愛敬があつたとかで評判は悪くない。売り込みというコトバはあまり聞かえがよいものならどうだろうか。せいぜい「川柳塔」のアドバ

ルーンをあげていただいた。

無題

★半ばほど前、作家の井上ひさし氏とNHKのアナ氏とのテレビ対談があつた。現代の若者がテーマの中心だった。もろもろの話の中心で興味深く感じられたのは井上氏が、「〇肉〇食」と書いて、この〇の中へ適当な文字を入れてほしいと云う。『弱肉強食』ではないだろうが、どんな字が入るかぼくも考えてみたが、正解は「焼肉定食」だった。

★川柳の題も「焼肉定食」的に、もうすこし飛躍していいのではないか。

★三月号の原稿の遅配が気がかりです。

（不二田一三夫）

昭和四十四年一月九日 第三種郵便物認可
昭和五十四年一月二十五日印刷
昭和五十四年二月一日発行(毎月二日発行)

川柳塔

二月号

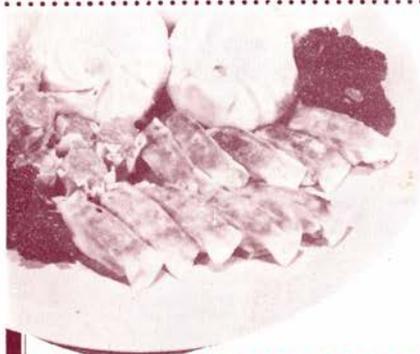
気どったカッコウはきらいだ、
思いのままに
装うのはいいものだ、
熱い心を満たす
オーエスケージエフ

OSK JEFF
ORIGINAL DESIGN

株式会社オーエスケ



あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ



ぶたまん やきぎょうざ
豚饅・焼餃子
しゅうまい ちゃあしゅうまん
焼売・叉焼饅

大阪・なんば



TEL (641) 0551

〔支店・出張店〕

なんば高島屋 心斎橋そごう 梅田阪神百貨店 天満橋松坂屋
中之島サン・ストア なんば新川店・新川売店 ドージマ地下支店
ミナミ地下虹のまち鹿鳴 京阪ショッピングモール 淀屋橋サン・ストア
近鉄百貨店(アベノ店・上本町店・奈良店)

定価 四百円 (送料・二十九円)